

針葉樹会報

1995. 2. 第81号



| | | |
|----------------|---------------------------------|----------------------------|
| 発行日 1995年2月28日 | 針葉樹会報 第81号 | 編集人 |
| 発行所 針葉樹会 | | 〒167 |
| 印刷所 篠田印刷 | | 東京都杉並区南荻窪 3-29-23 稲毛 尚之 |



針葉樹会報 第81号

目 次

| | | |
|-------------------------|-------------|----|
| 徳沢懇親山行報告 | 兵藤 元史(山行幹事) | 2 |
| 蝶ヶ岳散歩 | 小林 茂雄 | 2 |
| 屏風岩パノラマコース | 上原 利夫 | 4 |
| 槍ヶ岳 | 西牟田伸一 | 6 |
| 北尾根登行 | 金子 晴彦 | 6 |
| ひょうたん池 | 寺島 修 | 10 |
| ミニヤコンガ西側と康定周辺 | 中村 保 | 11 |
| 居室侵入罪? | 久保孝一郎 | 21 |
| 飯豊(いいで)山の妖怪——そして捲き路はあった | | 23 |
| この頃の夏の山登り | 山本健一郎 | 25 |
| お正月の屋久島登山——「お正月の山」その後 | 倉知 敬 | 27 |
| 「火打山を滑る」 | 加藤 博行 | 31 |
| 会務報告 | | 33 |
| 編集後記 | | 36 |

表紙写真説明 秋はふたたび

今年の夏は暑すぎた。朝、寝床の中で汗をかいて目がさめるのには参った。山に行けば涼しかろうと丹沢に出かけたが炎熱地獄だった。以来足は遠のき11月になって再び戻った。

山をおおっていた熱気は消え、山肌と樹木がその骨格をしっかりと見せていた。やはり秋や冬の景色こそが素晴らしい、そう思った。

(棚沢の頭より 蛭ヶ岳)

徳沢懇親山行報告

兵藤元史（山行幹事）

昨年（一九九三年）の懇親山行で、次は徳沢

にしようという提案があり、山行幹事としても異論無く（というよりは他の山を考えることもなく）今年秋季の懇親山行を、二〇名（ノ）の参加を得て、九月二三日～二五日に行いました。心配された天気も、夜間には一日とも雨が降ったものの、幸い朝までには止んで、紅葉の山を楽しむことができました。

二四日の分散山行につきましては、拙文の後に各々報告されるはずですので、そちらを御覧願います。

次回の秋季山行は、広河原―北岳ということに決まった（？）ようです。久し振りのバットレスに備え、トレーニングをお忘れなく。

尚、来年は春にも懇親山行を企画したいと考えています。五月の連休あるいはその前に、八方尾根での山スキー、唐松岳往復を考えていますが、山スキー中心で、もっと懇親山行に向く山があれば、山行幹事まで御教示頂ければ幸甚です。

△行動記録▽

九月二三日 徳沢集合、夜コンパ

二四日 分散山行 ①前穂北尾根（4人）

②蝶ヶ岳（5人）③槍ヶ岳（2人）

④パノラマ（6人）⑤ひょうたん池

（1人）⑥涸沢↓奥又白池（1人）

二五日 上高地にて解散

△参加者▽ 敬称略、（ ）内卒年

松下順吉（S19）小林茂雄（S19）石井左右

平（S23）山崎 擴（S23）伊藤恙生（S23）

山本健一郎（S32）上原利夫（S33）中村保

（S33）倉知 敬（S38）金子晴彦（S46）

西牟田伸一（S47）前神直樹（S51）兵藤元史

（S52）引地真（S55）引地景子、稲毛尚之

（S59）寺島 修（H6）古瀬泰介（学4）

吉武みゆき（学2）大谷公重（学1）

（以上）

蝶ヶ岳漫步

小林茂雄（昭19）

昨秋の川苔山、懇親山行の折、小寒い山頂で熱い豚汁に舌づつみを打ちながら、次は大勢のOBの参加を期待して、徳沢あたりでやろうではないか、と話合ったことが幹事の骨折りで九月二十三日からの連休にかけて実現した。

× × ×

今はむかし、昭和四十二年（一九六七年）九月、場所も同じ徳沢に大天幕を張った針葉樹会の懇親山行があった。多数の現役、若年部員に加えて、中川孫一さん、村尾金二さん、柿原謙一さん、山田亮之さんに、確か藤島敏男さんも参加されていた筈。当時、壮んな、これら諸先輩に接して、自分もあの年になって果たしてこの様に元気でいられるだろうか、一種、まぶしいような思いで見えていた。中でも、松高ルンゼを経て尾根に取付き、奥又白への急登の時、最年長の中川さんが、赤鬼の様に大汗をかき、光るオツムから薬缶の湯気の如き水蒸気を吹き上げていたことが忘れられない。

奥又白の池までで、降りるつもりだったので、我々以外には誰もいない池畔で昼食をたべながら、ガスに見えかくれする東壁を見上げていたら、山田さんが私の傍へ来て、「おい、これからどうする」と言いだした。時計を見ると二時

近かったような気がする。すったもんだの挙句、奥穂まで足をのぼそう、ということになり、有志を集めると五人ほどになった。此の時、山田さんの曰く、「前穂まで行けば、あとは吊尾根だけだろう。吊尾根というぐらだから高度差は大してないし、大体、平な道だよなあ」と言われて、そう言われればそんな気もするが、まあ出かけようと呑気なことをいいながら本隊と分れて出発したが、案の上、前穂の頂上で暗くなり、吊り尾根の登り降りを、ライトのご厄介になりながら、「こんな筈じゃなかったよなあ」と、しきりにポヤイていた誰かの姿がおかしかった。

折から上って来る月の光が、飛驒側に湧いてくる霧の上に、我々のシルエットを長く浮かべている幻想の世界に酔いながら穂高小舎に辿りついたのも、今は懐かしい思い出の一つとなった。

さて、今回の懇親山行は、近年では久方振りの二十人という大部隊である。

ふだん、街中で見馴れた顔でも山で一緒になると、妙に親しみを覚えるから不思議である。徳沢を基点として、北尾根へ行くパーティー。奥又へ出かける組。槍ヶ岳まで駆け足で往復して来る、という連中の姿に、三十年前の己れの像をダブらせながら、我々、大正生まれ組、松下、山崎、石井、伊藤と小生の五人は蝶ヶ岳の稜線から曾遊の山なみでも眺めてこようという

ことになった。この顔ぶれの中で、松下は去年、大きな手術をして心肺機能は常人の半分以下。

上高地―徳沢間の小さなコブでも立ち止まって、心気を整えるといった状態である。山崎は最近また、新しい仕事を始めたが、その会社の社長以下、全員が山の仲間という結構なご身分であるが、彼がどんな仕事をしているのか誰も知らない。恐らく本人にも判っていないのではないか、というのが定説らしい。古色蒼然たるローライ、フレックスを首にかけて、若い連中から「それはカメラですか」と聞かれて、ニタニタしている石井、前針葉樹会長。昔から、物ごとく動じないことでは第一級の大人の風格を持つ伊藤は、「今回は徳本峠へ行って来れば、以て瞑すべきだ」など、殊勝なことを言っていたが結局、我々と一緒に出かけることになる。

そして、斯く申す小生はと言えば、生来の怠惰から、此の世のことは大抵なんとななるもの、といったノーテン型のお陰で、未だに世の俗事から足を洗えずにヒイヒイと言っている始末である。今度も出発前夜になって、地図を探すのに苦労した挙句、やっと、汗とシミのついた昔の「上高地」五万分の一を見つけ出し、山に変わりはあるじゃなし……とリュックへ放り込んで来たが、よく見るとこれから登ろうという長堀山へのルートがなく、大滝山へ直接出る道しか載っていないかった。因みに、この地図は、大日本帝国陸地測量部、昭和六年六月発行、定価金

拾参銭というものであった。

こんなおめでたい連中が、新しく出来た村営徳沢ロッジを出発したのが七時三十分。松下は、自分のペースで行ける所まで行くから、お構いなく……と云うが、まあ、ゆっくり行こうやと半分、同情しながら、半分安心したようなことを言いながら、長堀尾根にとりついた。流石に、松下のピッチは上らず、時折、間隔が詰まる迄待つようになり、ちょっと尾根の広くなった所で積雪期の標識を辿り、どうせすぐ上で一緒になる位の所だからと、ここで暫く待つことにした。ところがどうも時間がたちすぎるといので、山崎が少し降りて様子を見に行ったが姿が見えないというので、四人で戻り、手分けして、下から登って来る人達に尋ねて見たが不明。一時間ほど費やした結果、伊藤が徳沢まで降りて消息を確かめた上、蝶の小屋へ電話してくれらることになった。

小雨模様の中を三人で登り続け、丁度、中間地点ぐらいの所にかかった所で、石井が足を傷めていることが判り、早昼飯をとりながら、様子を見たが、結局、無理しない方が良くということ、ここから下ることになる。

天候は依然として、すっきりしないが、山崎と小林の二人が再び登りはじめ、長堀の三角点を過ぎ、樹林帯がきれて稜線も近くなってくる、なかなかまどが、まだ淡い黄色であるが目を楽しませてくれる様になった。そして、水の涸

れた池塘が現れたその先に突然人影があった。山崎に言わせると、フワフワと歩いていてる人影が何んと、松下ではないか。これには驚いた。後ろから声をかけられた松下の方はもっと驚いたらしく、一瞬、声の主を探して上の方ばかり見ていた。松下に言わせれば、自分より下に仲間がいるなどは、夢にも思わず、昼食もくわずに一步一步、皆のあとを追っていただけに、これは一体どうなっているのだろうと思っただけらしい。

あとで判ったことだが、我々が尾根の広くなった所で待っていた時に、松下は通常の夏道を辿り先へ出た、そのあとを我々が一時間ほど探していたことになり、更に、時間からすると、我々が昼食を始めた頃は松下は我々のすぐ先にいたような計算になる。いや、それにしても恐れいりました。彼のトップ登頂に敬意を表しよう……ということ、霧と強風の稜線上で、三人が大笑いしたが、残念ながら視界は零。蝶ヶ岳小屋から徳沢ロッジへ電話して、針葉樹会メンバーへの伝言を依頼して、早々に下山する。

雨もようの秋の日暮れは早く、ライトのお世話になりながら、皆さんの出迎へを受けて徳沢へ着いたのは六時も過ぎていた。

聞くところによると、来年の懇親山行は北岳を予定しているらしい。是非とも山上で又、一緒に美味しいオベントウを食べましょう。(酒は飲めないから)

以上

屏風岩パノラマコース

上原利夫

一九九四年九月二四日、朝方の雨は止んだが、山の稜線は雲の中。徳沢ロッジに泊った中村保と上原利夫、テント泊の兵藤元史、引地真、同夫人、女子学生の吉武?の六名はこの新しいコースを選んだ。七時半に徳沢を出発し、新村橋を渡って松高ルンゼの方向に進んで行くと、奥又白池と涸沢への分岐点に到達する。ここからパノラマコースが始まるのだが、奥又白沢を渡って慶応尾根に取付く道をたどる。どんどん高度を稼ぐのだが、歩き易い。徳沢が標高一六〇〇メートルで、パノラマコースの最高地点である屏風のコルが二四〇〇メートル余であるから、八〇〇メートル余の登高。この間下方には梓川の白い河原が見え、蝶ヶ岳への尾根も目前に拡がっている。奥又白池畔のテントも見えた。曇ってはいるが、雨も降らず、眺めもよいので、このコースを選んだことに各自満足していた。一〇時四〇分にコルに到着した。昭文社の地図のコースタイムより短いのは、荷物が軽かったからだろう。

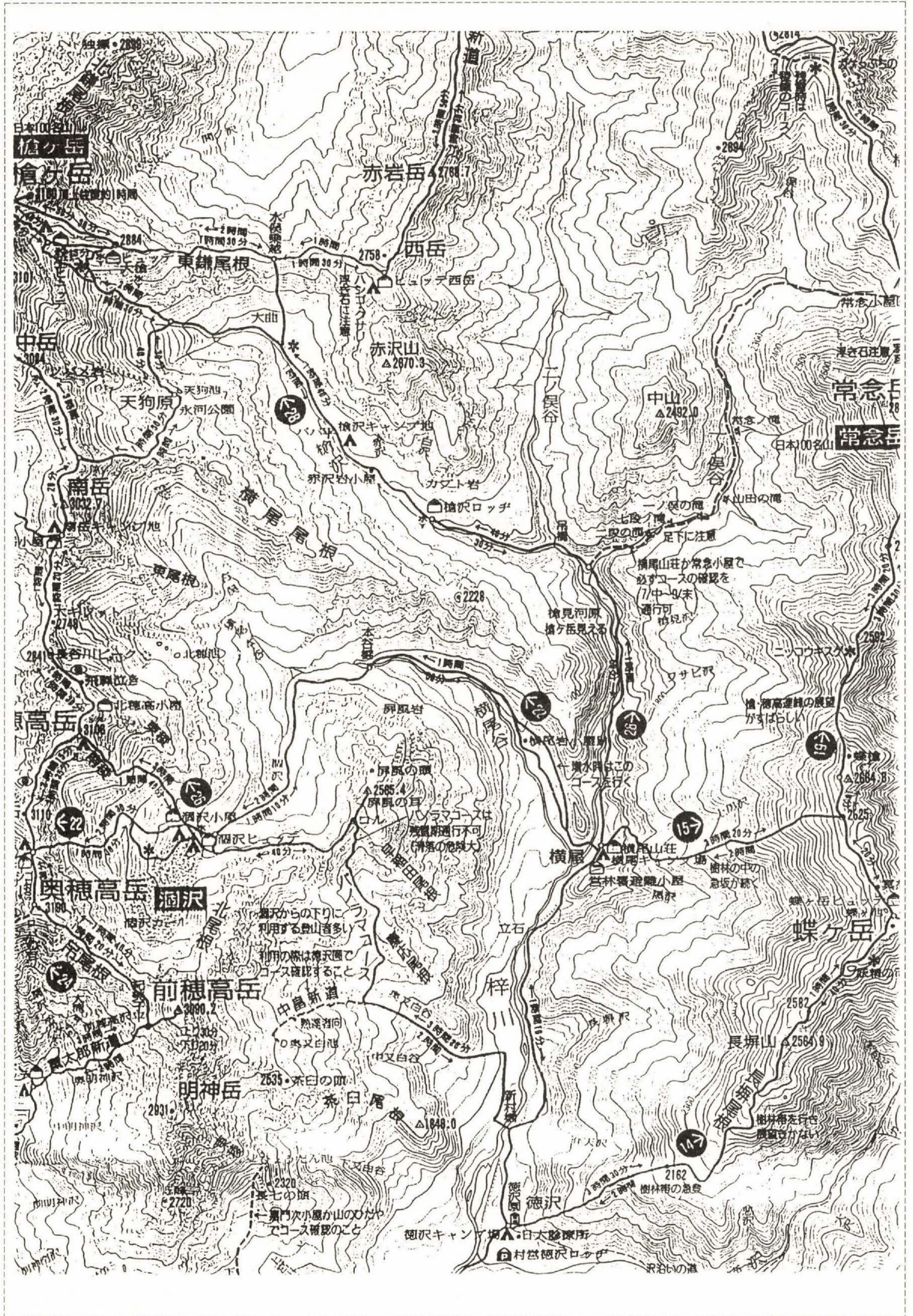
コルから屏風の耳(三角点、二五六五メートル)まで約四〇分かけて往復した。一三〇〇メートル位から紅葉が目に入るが、この往復では赤黄緑の錦の屏風を楽しませてもらった。屏風の耳からは、横尾山荘も徳沢園も梓川のほとりの森の中で、小さく赤い屋根を現わしているのが眺められ、お隣の国のようにだった。山の稜線に

は雲がかかっているのは惜しいが、雨が降らないので助かる。コルで昼食をとって、一二時に涸沢に向い、一時間弱で到着。

コルから涸沢までは、前穂北尾根第八峰の涸沢側の裾をトラバースして降って行く。高差は一〇〇メートル余である。樹林の間から涸沢ヒュッテ、赤青黄のテントが沢山見えた。この道は岩場の気分も味わえて面白い。しかし、何よりも涸沢の紅葉に魅せられた。話には聞いていたが、秋の彼岸の頃に既に紅葉のシーズンが始まり、見頃なのである。従って、訪れる登山者も多い。中高年者よりも若い人達が目につくのは、さすが涸沢である。私事であるが、最後に涸沢を訪ねたのは、三十四年前だった。中村保もやっぱり同様。それ迄は頻繁に来ていたのに、ばったり途絶えてしまったのである。

横尾への降りは、通いなれた路である。まるで昨年か一昨年のことのように、涸沢とか穂高の山々での記憶がよみ返ってくる。当時の思い入れは相当なものだった。だからいまだに忘れない。と同時に、この三十年間は何だったんだろう、と考え込んでしまう。今一緒に行動している学生や、若いOBと私自身は年齢差を感じないのである。これがOB山行のよい点ではなからうか。このように若返りをさせていただけなのは、最早若いとは言えない後輩達の、並々ならぬご尽力の賜である。今回のOB山行に参加出来なかった人達も、来年は万障繰り合わせて参加されんことをお薦めしたい。

(一九九四・九・二五)



槍ヶ岳

西牟田伸一

九月二四日(土)

本山行のメインイベントの日である。如水会報九月号の中島寛さんの「山を駆ける」には遠く及ばないが、私もこの八年ばかりランニングに凝っている。私が今回の徳沢合宿で目指したのもこれの延長である。槍ヶ岳を可能な限り短時間で歩いてみたいと思ったのである。同行者などは期待していなかった。日頃、練習にレースにとつきあってくれる倉知さんと金子はより過激な北尾根コースを選んだ。前夜の打ち合わせで稲毛君が同行してくれる事になった。翌日、スタート時の私のいでたちはパンツはスパッツにしたが、ジョギングシューズにランニングシャツ、野球帽という通常のシティーランナースタイルである。背負ったデイバックの中身は、雨具、防寒具、女房の作ったお握りなど必要最少限度とした。前日夕方横尾までは試走してあったが、一の俣までのほぼ平坦な行程は時間にして約半分ほど走った。稲毛君はかなりの早足で歩くので、槍沢ロッヂまで行ったところで追いつかれてしまった。

この日の槍沢は登山者が多く、追い抜くために登山道はずすのが厄介である。高度が上がると、下山してくる人の着衣が厚くなって行く。羽毛服などを着た人が私の格好を見て「若さだねー」などと冷やかしの声をあげる。結局、長袖のシャツを上羽織ったのは殺生小屋の下で最初の昼食をとった時である。肩の小屋に着くと飛騨側からの風が強烈で、すぐさま雨具以外のすべてを身につけた。手袋は軍手しかなかったので穂先を往復する間指先が凍るか心配する程だった。帰りは槍沢を真っ直ぐ降りるつもりであったが、稲毛君が天狗原に寄って見よう、というのでちょっと回り道をすることにした。ガスで眺望皆無の中を大喰岳、中岳を越えて、横尾尾根分岐から尾根を降り、ここから天狗原を経て槍沢へ下るというコル迄行った所で急に視界が開けた。北尾根はガスの中だが、屏風岩が頭まで間近に見える。眼下に広がる横尾本谷右股は、緑のハイマツと黄色く色付いた下草、白いガレに彩られたカール地形である。ずっと灰色の世界にいた我々にとって充分に魅力的であった。この谷は積雪期以外は利用されず道がない事は承知していたが、屏風岩があまりに近くに見え、この谷を降りようと二人の意見が一致するのに大して時間はかからなかった。

下り始めはガレ場の石を盛大に落とすつつ、落石による事故を避けるため、左右に分かれて快調に降りた。ある程度下って落石の危険がなくなると、にわか足元が不安定になった。稲毛君はドンドン下って木立の中に見えなくなつてしまふ。ここに来て私のジョギングシューズの弱点を痛感する事になる。底面の摩擦不足と足の甲の強度不足である。私は何度も滑っては転び、体のいろんな所を傷める事になった。悪戦苦闘の末、横尾から涸沢への途中にある本谷橋まで着いたときには、あたりが暗くなりはじめていた。登りより下りに一時間近く多くかかった事になる。

△タイム▽

| | | | |
|---|---|-------|-------|
| 徳 | 沢 | 発 | 6:30 |
| 横 | | 尾 | 7:00 |
| 一 | の | 俣 | 7:30 |
| 槍 | 沢 | ロッヂ | 7:50 |
| 大 | 曲 | り | 8:50 |
| 天 | 狗 | 原の分かれ | 9:10 |
| 肩 | の | 小屋着 | 10:50 |
| 肩 | の | 小屋発 | 11:45 |
| 横 | 尾 | 尾根分岐 | 13:10 |
| 横 | 尾 | 尾根の | 13:50 |
| 本 | 谷 | 橋 | 16:30 |
| 横 | | 尾 | 17:10 |
| 徳 | | 沢 | 17:45 |

北尾根登行

金子晴彦

七月の総会の席上、懇親山行は徳沢だと聞いた。そこにテントを張り周辺の尾根や谷を登ると言う。学生時代、涸沢への入山の途中、重荷にあえぎながら横目で見やうった光さんざめくキャンプ地と、楽し気に集うキャンパーの姿を思い

出した。あそこの草地に座って、ワインを飲みながら奥又白の谷を見上げる。しばらく山登りらしい山登りをしていないせいもあってワクワクした。「北尾根をスツキリと登りたい」と即決した。

北尾根の記憶は二六年前、大学二年にさかのぼる。初めての岩登り合宿で、涸沢のテントから眺めるそのリズムカルな岩峰の連なりに惚れ込んだ。六峰の南側にチョコンと座ったタヌキも愛らしい。天と地の境をゆく稜線を辿ると、まるで自由な鳥になったような気になされた。良い思い出と良い期待を携えて、四六歳の頃は徳沢OB合宿に参加した。ところが徳沢に到着した時点で北尾根に行くと言うメンバーは誰もいなかった。中又白谷、明神東陵、槍ヶ岳だのと言っている。いくらなんでも一人で出かけるわけにはゆくまい。一体どうやってメンバーをつつのるか。登山の前に難問が現れた。

倉知、西牟田両氏が横尾までジョギングするという。両氏の今回の目標は槍ヶ岳ジョギング登山。この事前訓練だ。「よし行きましよう」。毎週水曜日の夜、皇居の回りを周回ジョギングしている仲間でもある。正面から受けて立って梓川沿いの道をノロノロ歩く登山者達をヒラリヒラリとかわしながら走った。重荷を負って辛い思いでしか歩いたことのない道を裸同然で風のように走る。身軽だ。景色まで明るく軽やかに見える。横尾まで一五分。帰りには倉知氏に北

尾根に向かうルートを教えて欲しいと頼んで新村橋を渡って奥又白出合いまで登った。本音は倉知氏を北尾根に誘うためだ。出合いから見上げるのは高みの草つきは狐色に枯れた下草の中にナナカマドの赤い紅葉が点在し、その上に穂高の岸壁がのしかかっている。ゾクゾクするほど懐かしい風景だ。

徳沢に戻ると夫婦同伴で来ている引地に声をかけて見た。「いやあとでもあんな高度差は登れませんよ」とにべもない。真実を正確に知っているのだ。ぼくは「まあ夫婦同伴なら仕方あるまい」と現実には目をつぶった。「ところで学生はどこにゆくんだい。北尾根を知ってて損は無いいよ」。「そうですね良い経験ですから連れていってくださいよ」。「誰がいい」。四年の古瀬君くらいを期待していた。しかし、引地は「二年生の太谷君を頼みますよ」と言う。これはヤバイ。岩登り経験の無い一年生とたった二人だ。しかし、北尾根パーティー結成の芽としてはあだやおろそかに出来ない。プロジェクトというものは不完全ではあってもいささかの可能性の有る要素はまずはずからく包含しておよその全体像をつくりあげる度量が必要なのだ。「よし連れてゆこう」快諾した。

しばらくして遅れていた前神が到着した。出発前には明神東陵と言っていたが、ぼくの知らないメンバーはいない。いかに前神とは言え単独で出かけまい。「倉知、太谷とぼくとで北

尾根に行かないか」。そう切り込んだ。周辺事情を敏感に察知したのか即座に「いいですね」と来た。拍子抜けである。一旦目標を持ったなら、男たるもの少しはこだわるべきではないのか。しかし、まあいい、これでは倉知氏だけだ。既に横尾までジョギングしてしまったこと、奥又の出合いを見てしまったこと、そして、メンバーが三人まで固まったこと。これにもかかわらず倉知氏が参加しないはずは無かった。かくて今OB合宿において、事前には全く成立見込みの無かった北尾根パーティーは出発前日午後六時になって見事結成されることとなった。

ところがその夜大雨が降り、翌朝雨はあがったものの穂高は厚い雲の中。六時出発を予定していたが意気がならず、兵藤代表の中又白谷パーティーは「谷が濡れていては駄目だ」とさっさとキャンセル、倉知氏は「こんな天気じゃしょうがない。やめるよ」と言ってロッジの方に引き上げてしまった。即製パーティーの脆さである。それでも緑色のレオタード姿の西牟田代表の槍ヶ岳ジョギング組が六時四〇分、周囲の奇異の目をおして出発、北尾根組としては引くに引けなくなった。では三人で行くか、それにしても大谷学生は大丈夫か、などとウロウロしていると倉知氏が再び現れた。「まあ少しは陽も出てきそうだし、しょうがないですね」例の軽い笑いを浮かべて出発の意志を表明。一体どんな気分の変化があったのか分からないが六時五〇

分四人そろって徳沢をあとにすることが出来た。

ぼくは恥ずかしながらこれまで奥又白に入っ
たことは無い。台地の上の小さな池をはるか北
尾根から眺めただけでまずはぜひともその池畔
に立ちたかった。ところがそこまでの道の険し
さ。昨晚石井氏は昭和一九年二月の雪の中、大
型キスリングを背に夜の松高ルンゼをたった一
人で登ったと話された。そんなことはとても信
じられないほどの急峻さだった。あとから針葉
樹一一号で、その年の秋石井氏が軍に入営した
ことを知った。そんな時代背景の中での登山と
知って何か納得される気がした。池畔に着いた
時には当初の勢いは消え、早くも疲労。それに
しても満々と水をたたえ、真赤に紅葉したナナ
カマドや黄色の岳樺に囲まれた奥又白池は、唾
然とするほどに美しいものだった。寄り道につ
き合った大谷君と醤油色の池の水をゴクゴクと
飲んだ。

登りすぎたせいもあるのか、そこから五・六
の科尔への道はあまり判然としない。東壁へ向
かって上がって行く踏み跡ばかりが鮮明でトラ
パスする道はか細い。かつて北尾根から見た
時には草付きの中をくっきりと道が走っていた
記憶があるが様子が違う。こんなところを歩く
好き者は昨今少ないのだろうか。ガスの中から
四峰正面壁を登っているパーティーの緊張した
掛け声が聞こえた。

本谷に出て、五峰から下ってくる尾根の末端

を回り込み、再び登ってガスに巻かれた五・六
の科尔まではぼく一時間半。だいたい時間がかる。
科尔は二六年前の記憶よりは広く、五峰の傾斜
はやや急な尾根程度に感じられる。実はそこが
心配だった。どだいもう岩登りなぞやっていな
い。それが突然岩稜をたどると言うのはいかに
なものかと気になっていたが明るい感じだ。こ
れなら行けよう。

「これから登っても遅くなるからぼくはもう
ここで涸沢に下りますよ」。突然倉知氏がいつ
になく（！）冷静な発言をした。もう昼近い。
北尾根を三時間で登ってもそれから奥穂高、涸
沢、横尾、徳沢とさらに六時間半かかり、帰着
は九時半になる。これは問題だ。しかも視界は
ガスで全く無い。しかし、ぼくは行きたくてな
らない。昨日から画策してどうにか取り付きま
で来た。今後もう二度と北尾根を登るチャンス
など有るまい。「前穂から重太郎新道を下れば
上高地までは四時間ですよ」そう前神が言うの
をいいことに「そうです是非一緒に」と粘っ
た。倉知氏はだいたい考えていたが「ああいやで
すねえ。でも仕方ないから参りますか」と観念
した。浮き世の義理はつくづくメンドーなもの
だと思われたのではなからうか（深謝）。

二六年ぶりの北尾根はガスのせいもあるがルー
トが分かりにくかった。そもそも踏み跡があち
こちに有り、それぞれに薄くはかない。岩が不
安定で崩れ易くハラハラする。こちらのルート

ファインディングの本能もすっかり消えてしまっ
ている。「ちょっと違うんじゃない」との指摘
が頻繁に倉知氏からかかる。同氏には高校二年
の時にまるでマシラのように駆け登った記憶が有
るらしい。とは言っても四峰頂上まではまあま
あ予定通りに来た。

右手ガスの中に尾根が消えてその先で岩登り
をしている。「ザイルを引け」の「ビレー解除」
のと女性の声がある。「三峰涸沢フェースです
か、ガスの中で大変ですな」と言いながら頂を
やや下がったところで休みとする。大分ばてて
声が無い。正面のガスの中では「黄色引け」の
「青引け」のと、ダブルザイルを駆使してのや
や複雑な岩登りをしている。いったいどこに登っ
ているんだろうか。

休憩後三・四の科尔へと下り始める。明瞭な
リッジだが岩に踏み跡が無い。そんなに人が少
ないのかなとやや不審になる。それでもどどん
んと下る。雨がパラパラと来る。三峰の難所を越
える時に雨ではたまらない。急がなくては。そ
れにしても大胆に下る。リッジが急斜面に吸い
込まれたところでさすがに立ち止まった。「こ
りゃ下り過ぎる」。では一体我々はどこにいる
のか。正面のガスの中ではダブルザイルのパー
ティーの掛け声がいよいよ近い。意を決してガ
スに向かって「そちらはどこを登っていますか？」
と誠に間の抜けた質問をした。ややして「私ら
ですか」と不審げな返答が有り「そうです」と

答えると「右岸稜だ」ときた。正面に右岸稜が有る。とすればぼくらは四峰から正面壁側へ下りていることになる。何てことだ。上へも下へも逃げ場の無い場所で道を見失ったのだ。中年登山者疲労遭難。相当にくたびれているせい、途端に陰鬱な思いが湧く。

ここまで無理矢理皆を引っ張ってきた張本人としては何としても正規ルートを捜し出さなければならぬ。かつて幾度か見舞われた懐かしきパニック感を背筋に感じながら元来た道を力を振り絞って登り直す。先刻休んだ場所からさらに登ってみる。錆びた空き缶が岩の間にいくつも有る。アイゼンのツアツケの跡のついた岩が続いている。そうこれこそが人の道だ。疲労のせいで高みを迂回しよう、迂回しようとして回り込んだのと、右手で岩登りのコールが有ったのが敗因だった。岩稜は右手に続き、ほどなく三・四のコルへと明瞭な道が下っていた。先刻のコールは正に三峰の登りでアンザイレンしているパーティーのものだったのだ。

三峰の登りではザイルを三ピッチ伸ばした。最初は岩溝を登り最後の蓋の様な岩を左側からかわす。次は何と言うことも無い岩の階段で、最後にチョックストーン状の岩をこれまた左からかわす。その上が細かいクラックになっていてやや岩登りと言う雰囲気がある。大谷君はいかにも嬉しそうに登る。そう、大分ガタの来たO B だけど一緒に来てよかったろう。ぼくも嬉

しいよ。道を失ってひきつった先刻とは様変わりだ。二六年前ぼくもここを興奮して登った。垂直の散歩をすると、尾根道を歩いている限り避けられない地上に張り付いているという思いからスーッと解放されることを初めて経験したのだ。それを思いだした。「岩登りはどう?」。そう大谷君に聞くと「イヤーとてもあんなことは出来ません」と答える。今自分がやったことは棚に上げて、ガスの中の右岸稜パーティーの活動こそを岩登りと見ているらしく、それが出来ないと言う。オオモノだ。

このピッチが終わるとさしたることも無く前穂の頂上。さすがにほっとした。しかし、既に三時半、徳沢からはほぼ九時間が経過した。引地の言った言葉「あんな高度差は登れませんよ」が俄然真実味を帯びて来た。ガスで何も見えないう頂上に立ち止まりもせず下りかかった。奥穂を回るなどと言う者はいなかった。ひたすら重太郎新道を下ることで衆議は勝手に一致していた。また、雨が降り出した。それにしても四峰の先でルートを失った時に右岸稜を登っているクライマーがいてよかった。そして三峰を登っている時に雨が降らなくてよかった。ひそかに神に感謝した。しかし、この日はこれで終るわけではなかった。

重太郎新道は実に良く出来た道である。大体眺めが良い。常に岳沢とそのかなたの梓川の谷そして遙かの焼岳、さらには乗鞍が見える。し

かもわずか一キロメートル程度の間の一・三キロメートルの高度をかせぐ、急峻さを誇っている。しかし、それだけに、下るにつれ疲労がドット足に来る。紀美子平の下のやや幅広い山稜が終わり明瞭な岩尾根になったところでやっこのことでガスから抜け出した。上高地が絶望的に遠い。あそこまで下って再び徳沢まで戻らなくてはならない。ところが大谷学生は見るなり「近くに見えますねえ」と嬉しそうに声を上げる。ガックリきたOBは、コブ尾根や南稜を眺めるフリをしてひたすら休憩時間を長引かせる。それにしても正月に南稜を登るなどと言う計画はもう諦めよう。ウェストン夫人はスカートで登ったそうだが、雪の中を這い上がれるような傾斜ではない。岳沢ヒュッテの小さな赤い屋根が岳樺越しにはるか下に見えるると飛んで下りることばかり考えた。

ヒュッテの周辺は大変な数のテントが有り正に夕食の最中。ヒュッテでも「二回目の夕食の方!」などとアナウンスしてうまそうな匂いが出ている。こういう時間にこうしてゆっくりと山を見ながら食事をすると言うのが今回の大きな目的であった筈だがとてもそんな状況ではない。ここでは気力が萎えると言うことでヒュッテを越えて再び河原に出るから明るい間の最後の休憩をとった。五時四五分だった。

ヘッドランプをつけて出発。長旅の仕掛人のくせに僕はライトを徳沢に置いて来てしまった。

ザックの中でつけ放しになっていて電池が切れた。大きな誤算だった。石のゴロゴロしたデコボコ道を歩く辛さなどあまり気にしたことは無かった。それがバランスがとりにくく、はてはその繰り返しに頭まで痛くなる。しかも、次第に暗くなる。森に入れば土の踏み固められた平らな道だろうと期待していたが全く変わりない。ライトを持った前神と大谷にはさまれるようにして歩くが足下は自分の影で真っ暗で見えにくく、バランスを失って転びそうになる。わずかでも両足が水平に置けると心底ほっとする。無灯火、疲労、バランス感覚退化、そして速筋なる衝撃吸収筋肉の縮小。四重苦だ。梓川の瀬音が聞こえるようになっても明かりは見えず、たまらず「まだかあ」と倉知氏のうめき声があがる。一時間ごとに鳴る様にセットしていた時計がピッと鳴った。とうとう七時、徳沢ではもう皆が心配しているだろう。

先方に明るいライトが見えた。近づくでも遠ざかるでもなくウロウロしている。合流すると「カッパ橋はこちらでいいんですか」と向こうから聞いて来た。ライトは有ってもあまりの暗さに方向を失ったらしい。梓川右岸を奥又白まで登る林道だ。ぼくらはザックを放り出して地面に大の字になった。

ライトを照らすと手近な木々の枝が銀色にボヤリ浮かぶばかりでその先で光は闇に吸い込まれてしまう。ライトを消すと自分自身消えか

ねないほどの闇だ。その闇に向かって歩き始めた。ありがたいことに、道は平らだ。思わず感謝。しかし、程なく、黙々と歩くには単調で淋しい気になる。歌を歌い始めた。前神も歌う。カラオケなら兎も角山の歌を大声で歌うなど久方ぶりだ。OBが歌詞を忘れて窮すると大谷学生が「星に願いを、を歌わせていただきます」と言って始めた。高校時代合唱部にいただけあって見事な歌だ。ぼくらは嬉しくなって聞きほれた。単調な林道歩きをこうして救われた。

明神池の横を通過して梓川をわたりようやく徳沢への道に合流した。明神館はガラス戸を閉めて店仕舞、夕食はとれなかった。ここから大谷学生を徳沢に先行させて我々の無事を知らせてもらうことにした。ここまで来れば急ぐ必要も有るまい。しかし、幸いと言うのか、とうとうと言うのか大休止を経て最後のピッチを歩き始めると雷が炸裂し、沛然たる雨となった。稲妻が森に射し込むと、あたりは一瞬、目もくらむ様な銀色の世界になる。冷え冷えと銀色に輝くブナ。飛び散る銀色の雨脚。まるで夢の世界だ。そしてよくぞこれほどと思えるほど傍若無人の雷鳴。おかげで歩くのが辛いなどと言う現実的な思いは遠のき、代わりにバケツをひっくり返した様な雨の中をユメ・ウツツのテイで歩き続けた。

突然堰堤の上に出た。徳沢の入口の手前にあるものだ。ほどなく牧場の生け垣状の茂みがあ

らわれ、その向こうにキャンプの明かりがいくつも見えた。九時一五分だ。それまでのドシャ降りの雨も急におとなしくなり、水気をタップリ含んだ冷たい風がテントをはためかせた。「お帰り」。心配して待っていた連中が出迎えてくれ、早速野菜炒めライスの夕食となった。一四時間を超えるOB山行はようやくにして終了した。

草地に悠然と座って奥又白を見上げることは出来なかった。しかし、おかげで、メンバー集めから始まって、ビッグルートをとどる登山という活動のスケールの大きさとその達成感を実に久しぶりに味わうことが出来た。次はチンネの左稜線だ。帰りの車中で性懲りも無くそう思った。

メンバー：倉知、金子、前神、大谷

タイム：徳沢（6：50）、奥又白池（9：40）、

五・六のCOL（11：20）、前穂高（15：30）、

岳沢ヒュッテ（17：40）、上高地（19：10）、

徳沢（21：15）

ひょうたん池

寺島 修

徳沢（7：10）——明神橋（8：00）——（9：50）

ひょうたん池（12：20）——（13：30）明

神橋——徳沢。ひょうたん池に行く道へは明神

の養魚場から入る。登山道の標識が出ているわけではなく、ほんとうに入っているのかと思いつながら、どんどん行くと、やはりそれが登山道であった。同じような斜度が直線的に上へと続くことができた。

道を登っていくと、一時間で一九五〇メートルの所。ガスの中に明神の岩場が迫って見える。さらに一時間でひょうたん池。水の中には、足の生えたおたまじゃくしがうようよいいた。計画

では、ここから奥又の池をまわって奥又白谷へと行くことにしていたので、奥又への道（踏み跡）を求めて、明神東稜への道を登る。が、見つけられず、かなりの所まで登ってしまっ引き返す。途中、強引にトラバースを試みたが、下又白谷に切れ落ちた崖につきあたってしまう。谷底で、シカが一匹、水を飲んでいた。帰路は、来た道をのんびり明神へと下った。

ミニヤコング西側と康定周辺

（一九九四年四月）

中村保

香港滞在中も終りに近づいてきたので、前後一〇

回に亘る四川・雲南の雪山撮影旅行の仕上げに、ミニヤコング西面のパノラマを子梅山から写真に収めることと、康定周辺の山塊の概念を整理するために三月三十一日に成都に入った。この年の二月、冬の雲南省中甸と麗江・玉龍雪山への旅では雪が少なくて拍子抜けだったが、四月上旬の四川の山はまだ雪深く冬山の気分を味わう

1、準備及び受入側の状況

行程を辿る以前のことについての実情にふれておきたい。雲南でも同じだが、奥地への旅行

で、いつもながら直面し、困惑し、フラストレーションが募ることである。中国社会の風土とシステムを大いに反映している。

（旅行社とガイド）

四川探検旅遊会社の張繼躍氏に一九九一年の四姑娘山のトレッキング以来世話になっている。張氏は四川省登山協会のガイドをして働き、登山・トレッキングのみならず、むしろラフティングのエキスパートである。英語もよくこなし、お客はアメリカ人が多く、スマートで、中国人に特有の商売的がめつさは無い。二年前に独立

して旅行社を設立し今日に至っている。ただし経営は難しいようだ。開放政策のお陰で急増する外国人観光客をあてこんで民営の旅行社が乱立し、競争は過熱している。四川登山協会も競争に晒され事務所の移転を余儀なくするほど厳しい状況にあるようだ。

張氏の場合も同様で、レストラン経営など、多角化を目ざしており、新たな商売を模索しているが、奥地旅行を売りものに行っているのに本業が疎かになるのが懸念される。もう一つの問題はガイドの質である。登山に興味を持ち、経験のある要員はほぼ皆無である。ガイドとは言うても名ばかりで、素人のアルバイトがついてくのが実情である。通訳として使うこと、宿や食事の世話をすること以外、道案内としては役に立たないどころか、かえってミスリードされる恐れがあると思っておいたほうがよい。就中、山の位置関係等については、ガイドもさることながら土地の人間の情報も鵜呑みにすると、せっかくの貴重な旅行の成果が誤った記録として残される危険がある。自分の慎重な判断を常に優先すべきであろう。

（車と費用について）

出発前の準備段階で、いつもながら必ず要求しておくポイントが三つある。曰く、良い車、トヨタ、ランドクルーザーか三菱パジェロを用意すること。山間地のドライバーに経験豊かで、信頼のおける運転手を雇うこと、出来る丈地図を用意しておくこと、であるが二人の運転手を

除いて、満足させられたことは一度もない。地図については後述するので、ここでは車と費用に関してふれたい。

泣く子も黙る公安は言わば特権階級、メタルカラーのバジェロの新車を我がもの顔に乗り廻しているが、もともと車の不足している中国では、個人の旅行者にあてがわれる車は、苦勞して調達してくれるにしても、タイヤが擦り減り、ガタのきいているものしか手に入らない。そこで成都に着いた早々、文句が始まる。今回も、三年前に攀枝花―西昌―康定と長征のルートを通ったときに使った時の同じランドクルーザーが待っていた。三年前で走行距離九万キロ、そのときでも不安を感じたが、今はすでに一六万キロを超えている。取り替えて欲しいと迫ったが、代わりは無いとのこと、信用できる運転手の盛さんに自分が安全を保証するからと慰められて、引き下がらざるを得なかった。悪路のなか、車の調子がいつも気にかかる。

運転手の良し悪しも、旅の快適さを大いに左右する。長征ルートにも同行してくれた冷静で腕も確かな盛さんは成都地質研究所の運転手として、四川、東チベット、青海省のほぼ全域に精通しているベテランで頼もしい人だが、二年前の冬に峨眉山から金沙江（長江上流）のゴルジュ地帯、イ族の町、雷波を訪れたときのドライバーは悪質な奴だった。ジャッキ等の工具を用意してこない、雪の山道でスノチェーンを装着しない、このため危険な目にあっただけでな

く、大いに時間を無駄にした。あげくの果てに、帰路、宣賓から自貢に向かう街道で、あきれた体験をさせられた。夕暗が迫ると、宿場の粗末な飯屋の前に一六―一七才のまだあどけない娘さんが、厚化粧をして、黄色い声で通りがかりの車に声をかける。トラック運転手相手の商売である。近在の農家の娘さんのアルバイトで屈託はなく誘う。突然、運転手が、今夜はここで夕食をとり、泊まってゆきたいとゴネ出し、ガイドと喧嘩になり仲裁に入らざるを得ない羽目になった。ガイドも遊び人だが、さすがにお客をこんな場所に泊まらせる訳にゆかぬと頑張ってくれた。改革・開放の負の面がこんな辺境にまで及んでいる。

話題を費用のことに変える。個人旅行の場合、基本のサービスは、ランド・クルーザー（或いはバジェロ）一台を専用で借り切り、ガイド一名、運転手一名の構成で成都（雲南の昆明からでも条件は同じ）を発ってから戻るまでの全ての費用を客が負担する。精算の仕方は次の二通りある。

(1) 予めルート、日程を設定し、一日幾らかを決めておく。三―四年前は米国ドルで、一五〇―一八〇ドル/日であったが、今は二〇〇―二五〇ドル/日をみておいた方がよい。ドルベースでは相当上がっているが、円ベースではさして上がっていない。この方式は簡単なようだが、ルートの変更、日数の増加の際に追加料金の交渉となり、予想以上ふっかけら

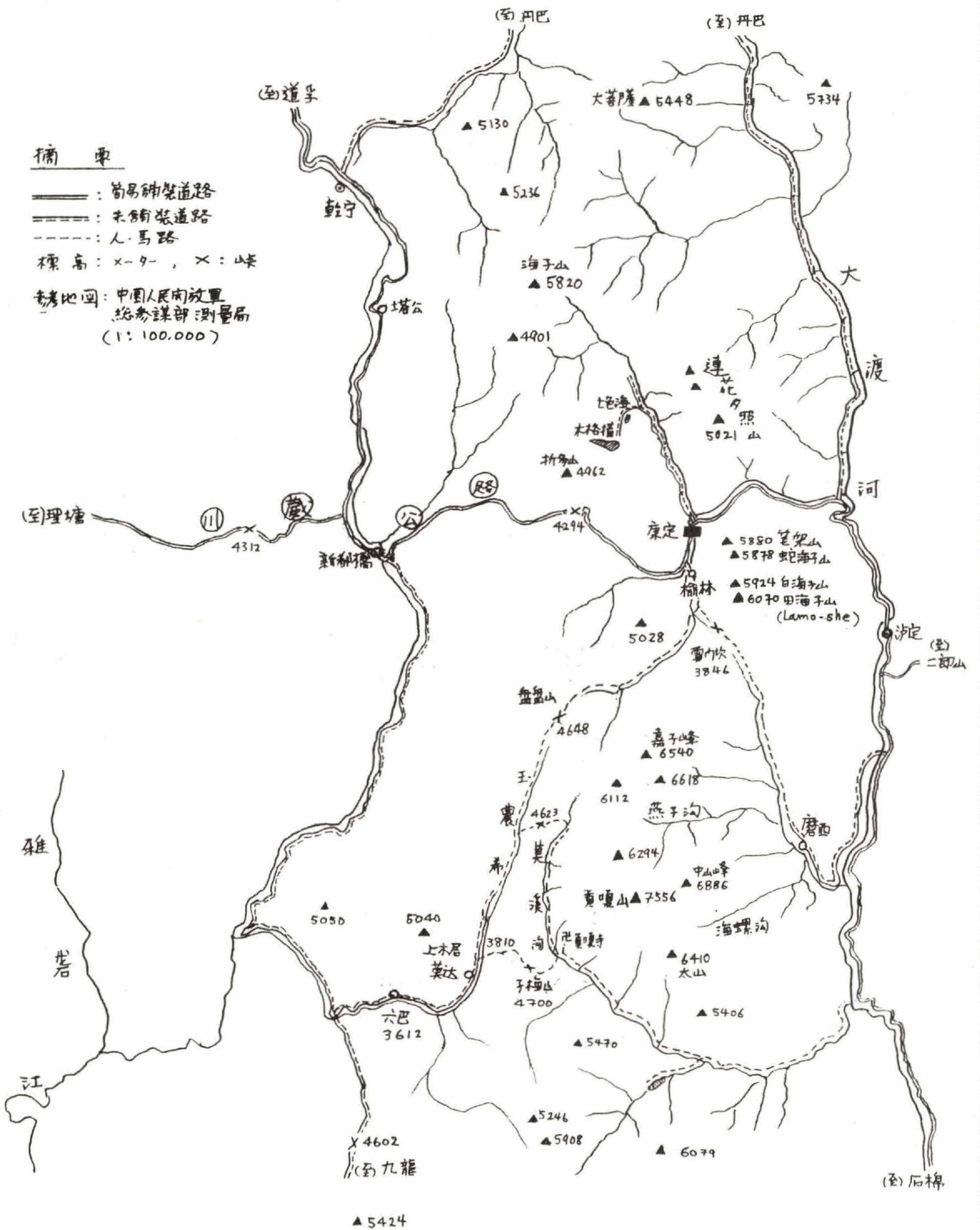
れることもあるので要注意。出発前にエキストラ分の精算方法を決めておくべきである。

| | | |
|----------------------|---------------------------------|-----------|
| 期 | 間：94年4月1日～9日、9日間 | |
| 車 | 代：走行距離 1,624km × US\$ 0.60/km = | 974 |
| | 3日間の停滞日 × US\$ 50/日 | = 150 |
| 宿・食事： | 3名分 US\$ 50/日 × 9日 | = 450 |
| 馬 | ：2日間、延べ7頭 × US\$ 15/1頭 = | 105 |
| 管理費 (100) + チップ (30) | | = 130 |
| | 計 | 1,809 |
| | (1日平均 | US\$ 201) |

はガソリン代、運転手の報酬を含む。更に各費用を内訳をつけて合計して精算する。こちらの方が安心し、納得できよう。具体的な例として今回の精算の内容を以下紹介したい。単位は米国ドル。

一キロメートル当りの車の単価、US\$ 〇・六〇は安い。グレードの高い車を使う場合US\$ 〇・七五―一・〇〇は要求されよう。運転手、ガイドの日当は各項目に含まれている。

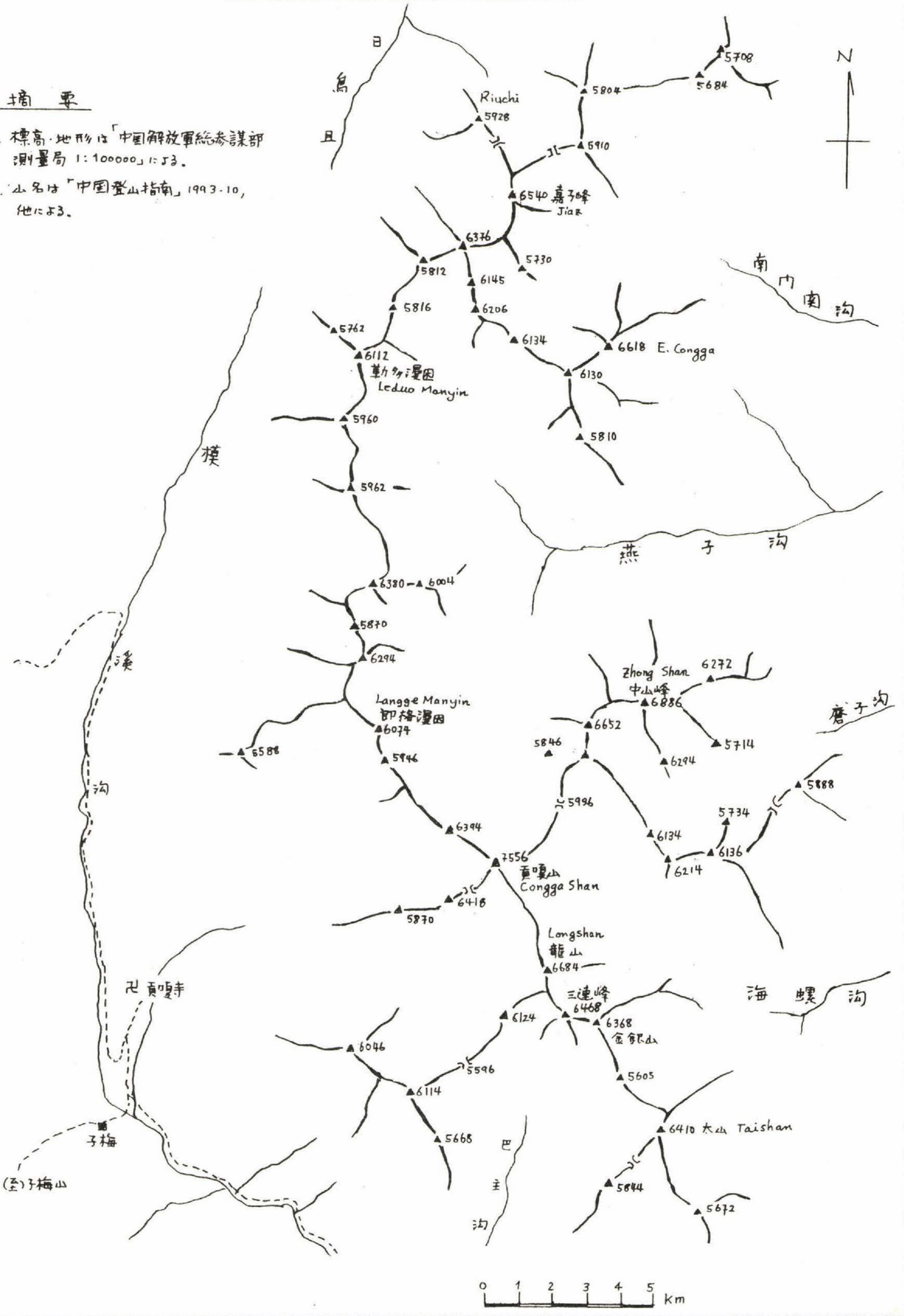
ミヤコガ・康定周辺の雪山概略図



ミヤコンガ山群の標高図

摘要

1. 標高・地形は「中国解放军総参謀部測量局 1:100000」による。
2. 山名は「中国登山指南」1993-10, 他による。



ヒマラヤと違って、四川・雲南は、登山情報、地域情報が一元的に整備されていないことのみならず、地図が外国人には公開されていないことが山の位置、地形等の概念を知る上での大きな障害である。旅行社に前もって要求しておいても手に入るものは断片的で限られていて、満足にはほど遠い。勿論、中国には、実測量にもとづいた一〇万分の一の地形図があるが、人民開放軍の管理のもとにあり、原則門外不出である。また省別の各省が発行している四〇万分の一の、比較的よく山の位置、高さが表示されているカラー刷りの地図集があるが、これも外国人は公に手に入れることは出来ない。それでも昨年、中国登山協会の協力で「中国登山指南」が発行され主な山群の概念はつかめるようになった。そこで、こっそりコピーをとらせてもらった。また、ONCの地図（高度が不正確、地名が中国名に合わない）や市販されているロードマップをもとに点と線をつなぎ合わせる。マイナーな山群について、写真とつき合わせ、指定も加えて概念図にまとめているのが実情である。したがって不正確さは避けられない。一方、もう一つの不便さは中国側の同行者は一様に地図を読む習慣がないので、ガイドと言えど名ばかりで、地図を見ても関心も示さず、理解し、判断しようと言う態度を期待すべくもない。知りつつも不満がつる。

2 康定周辺 Lamo-she(田海子山)、雪の折多山
三月三十一日、成都入り、馬小姐の出迎えを受け、錦江飯店に落ち着く。馬さんのことは別に書きたい。

四月一日、旅の同行者はカイドの毛さん、運転手の盛さん。毛さんとは一昨年雪宝頂、九寨沟紅原へのツアーをしている。日本語、英語とも達者であるが、打ちとける性格ではない。二九才、新中国の偏差値タイプ。この日は石棉泊り。川藏公路の最初の難所、二郎山がトンネル工事のため閉鎖され、雅安から石棉経由の道を迂回する。改革・開放の波が押し寄せてきている。三年前と比べて石綿の街は見違えるほどきれいになり、物があふれ、活気に満ちている。

四月二日、通い慣れた大渡河沿いの路を、行きかう材木運搬トラックとのすれ違いに冷やひやしなから、海螺沟の入口、泸定を過ぎ、康定に着く。康定で六巴から先の案内をする邹さんに会う。ガイドの毛さんは目ざす方面の土地勘がないので、旅行社がコネで、六巴に親戚が居る邹さんを探し当て、道案内をもらうことになった。邹祥勇、二三才、康定生れのチベット人で康定体育学院の先生をしている。が例によって山の知識は全く無い。彼から康定東側のLomo-she山塊についての情報を得ようとしたが、全く無関心で何も聞き出せなかった。

四月三日、快晴、四日目の康定で初めてLomo-sheの全容をまのあたりに見ることができた。



ミニヤコンガ主峰(7,556メートル)西面

東面は二年前に二郎山からカメラに収めたが、西側を間近に仰ぐことができ感激する。六、〇七〇メートルを主峰とする幾つかのピークが南北に連なる重量感のある山塊である。一九三〇年にドイツ隊が測量を行っている。人民解放軍の地図とつき合わせて概念図を作ってみた。登山記録はまだ手にしていないので情報としてまとめられない。昨年はアメリカ、モンタナ州の連中が入山、五、九二四メートルの白海子山と思われる一峯に登頂しているが、視界のきかない中で頂上とおぼしきところに立っているので、

特定はできない。現在、AAJの記録をたどり、且つ入山者に手紙を出して問い合わせをしているので、早晚まとめて、別にレポートしたい。ここで、地図について補足しておきたい。前述の人民解放軍の地図の区分は次の通りであり、六枚でミニヤコンガ及び康定周辺をカバーできる。

中国人民解放軍総参謀部測量局発行(10万分の1)

| | | |
|-------|-------|------|
| 雅江 县 | 康定 县 | 姑 咱 |
| 祝 桑 区 | 先鋒公社 | 泸定 县 |
| 孜 河 区 | 貢 嘎 山 | 宣 東 |

朝陽に輝くLomo-she、五、〇〇〇メートル級の折多山の雪山の連なりを、右に左に感動が高まる。四、〇〇〇メートルから上はまだ冬の銀世界、折多山峠をこえると、西側は人も風物もカム、かつての東チベットの領域である。チベット人が馬で駆け、ヤクの群が遊ぶ。とは言え漢族の進出も多く、川蔵公路沿いの町の建物の様式は風情のない最近の中国式であり、商売は漢人が中心である。チベット人のかかえる苦悩は大渡河の西側から始まる。いまでも文革の爪跡がいたましい。

3 六巴から上木居、子梅山

ミニヤコンガを望見できる新都橋から川蔵公路から分かれて雅砻江支流沿いの路を南に下る。海拔約三、五〇〇メートルの明るく開けた谷沿いに段丘の畠でチンコー(大麦)の植え付けがはじまっている。このあたりのチベット人は半

農半牧で定着した生活をしており、表情もおだやかである。下るにつれて、河の流れはしだいに急になり、兩岸は狭まる。針葉樹が現われ、支谷の奥に五、〇〇〇メートル級の雪峯が次々に現れる。半日のドライブのあと、本流から離れて六巴への美しい溪谷を上る。予定では六巴に泊って、子梅山(ミニヤコンガ西面の最良の展望台)へ向かうための準備を邹さんの親戚にしてもらおうつもりだったが、埒があかない。村長以下集まってきて話をするが、まだ雪が深くて峠に登ることはできないと言う。が、こゝまで来て引き返すことはできない。すでに気乗りのしなくなっている毛さん、邹さん叱咤して、とにかく先に進む手筈をさせる。玉農希から子梅山への登り口付近の上木居の知人あてに村長さんの紹介状を書いてもらい六巴を後にする。溪流を抜けて道は再び大きく開けた玉農希の谷に入る。

この谷、玉農希はミニヤコンガ西側の莫溪谷沟から五、〇〇〇メートル弱の山稜を隔て更に西側に位置する雅砻江支流の原流で広々とした谷である。この山稜からミニヤコンガ山群のほぼ全貌が一望に収められる。子梅山は無雪期にはチベット人の往来に使われている。夕暮近く上木居村の摸込中巴に着きチベット人の家に世話になる。どうなることかと心配してきたが、紹介状が効いたためか、一家が暖かく迎えてくれた。このあたりは標高約三、七〇〇メートル、

そろそろ高度の影響が出はじめて、眠れぬ長夜に悩まされはじめるところだ。去年はフランス人が一人入って来たが、今年はまだ誰も来ないと言う。懐かしい囲炉裏のそばで、バター茶、ツアンパ、チンコー酒のもてなしを受け、くつろいだ時を過ごしながら、行政単位、家族、生活についてつれづれ聞いてみた。

(1) 行政単位：四川省甘孜藏族自治州康定県六巴郷土木居村摸込中巴(字に相当)。奥地を旅して、それぞれの場所を正確に聞き出すには結構手間がかかる。



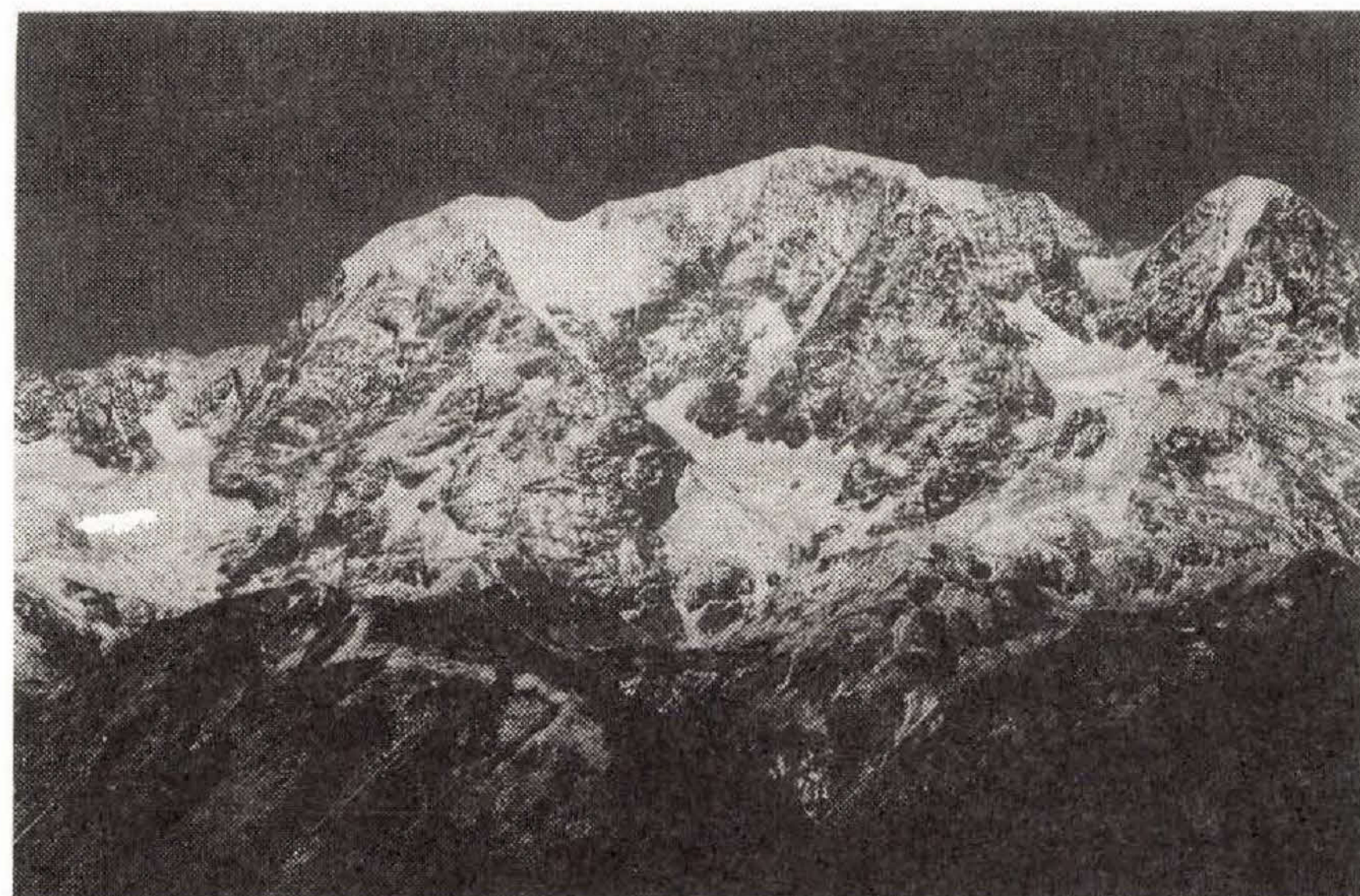
ミニヤコンガ衛星峰



折田山峠付近

- (2) 家族のこと：…母系家族的な雰囲気を感じさせる。一家の要は母親の木穷（ムチュン）さん。六巴郷の共産党組織の婦人部部长をしているだけに聡明で、所作もてきぱきしている。主人の四郎（スラン）さんはトラックの運転手で康定との間を往復している。子供は三人いて一八才の長男と妹は牧畜と畑の仕事、次男は新都橋の中学で勉強をしている。両親とも上木居生れ、教育熱心な家庭である。
- (3) 居住のこと：…谷筋に約二〜三キロメートルおきに、数戸から十数戸の三階建の石造り

- のガッシリした家が小さな集落をつくっている。東チベット（カム地方）風だが、同じ雅砻江の流域でも標高が下り、木材の豊富な場所になるにつれ材木を多く使っているところとは対照的である。村の中心の忠巴（字）にはラマのゴンパがあり、チベット人の領域である。一階には家畜を入れ、二階は囲炉裏と炊事場を持つ広い板張りの居間と二つの個室、三階も幾つかの個室になっており、よく整頓清潔さが心地よい。トイレも不快でない。
- (4) 生計のこと：…木穷・四郎さん一家の生計は半農・半牧と運転手の稼ぎから成り立っている。家畜はヤクが二三頭、やぎ二頭、ひつじ一八頭、馬二頭。農耕は主としてチンコーを二〇ムーの畠から収穫している。年間の現金収入は一五、〇〇〇元（約一八万円）と四郎さんは答えてくれたが、チベット人の平均的レベルからは高すぎるので、かなりサバを読んでいると思う。生活環境は遊牧民と比べれば快適さ、豊かさの点で比すべくもない。電気も六巴の小型水力発電所からひかれていた。
- (5) 生活のこと：…ゆるぎない生活規範が感じられた。お金を払うとは言え、一見の外国人に対して、てらわれない自然体のホスピタリティーが嬉しい。しっかり者の木穷さん、ホステスとしての気配りと、それでいて控目な態度が安らぎを与えてくれる。その躰を受けた長男の素直さも真に好感のもてるもので、いつも



Lamo-she（田海子山）6,070メートル

ながら想い出に残る、心暖まる少数民族とのふれ合いである。が、貧しく苛酷な風土に生きるしたたかさ、商人的な金銭感覚を身につけているところは中国の農民と共通する部分もある。

四月四日、曇後雪、朝早立ちして馬三頭に分乗して子梅山に向う。木穷さんの長男が案内役を勤めてくれる。実に愛想がよく、気をつかってくれる。が、峠への支谷に入り、少し登ったあたりで雪になる。四、二〇〇メートルから上は雪深い。この日は断念して引き返す。昼頃か



莫 达 忠 巴 (上木居村)

ら、四月だと言うのに風雪となり谷は銀世界、冬に戻ったのだろうか、低気圧が来たのだろうかと不安がよぎる。夜になっても雪は止まない。四月五日も吹雪、気温はさして下がらないが、終日囲炉裏を囲む背中では冷え込む。半農半牧の土地で谷筋は灌木が茂っているので、燃料には薪を使っている。テント生活、ヤクやひつじの糞を燃やす草原のチベット人とは違いがある。カム地方の多様性と言えよう。日本のかつての山深い田舎に居る錯覚にとらわれる。

四月六日、寒さで目を覚ます。雪は止んで雲間に星が見え隠れする。朝方は小雪がちらつ

ていたが、雲が切れ東側から青空が広がる。出発時刻は遅くなったが、馬四頭を仕立てて一時頃子梅山に向う。本谷から支谷に入り、四、二〇〇メートルぐらいのところまで馬から降りて、馬をひいて峠への雪の斜面をあえぎながら登る。膝までもぐる軟雪のラッセルは高度の影響もあってこたえる。雲はすでに去り、限りなく濃紺の蒼天を見上げ、極度にまぶしい雪面にへたりこむ。強烈な紫外線がみるみる肌を焼く。トレーニング不足の体調には無理のしすぎだったが、二時間後に四、七〇〇メートルの子梅山に這い上がる。

眼前にミニヤコンガ山群がほぼ一八〇度の視界に現れる。月並みな表現だが息を呑む瞬間である。正面の主峯(七、五五六メートル)のピラミッドが際立って聳え、南北に六、〇〇〇メートル級の衛星峯が連なる。子梅山が展望台として最適な所であることを確認する。

衛星峯の一つ一つについて山名、高さを特定するには資料不足であったが、折多山に続く雪原に遠望される二つのピークは気になる存在である。

いずれ地図と写真をつき合わせて判定してゆく作業を折り返しを行って楽しさを残してくれた。帰国後知ったことだが、四週間後、ゴールドンウィークに広島山の会の人達がミニヤコンガ主峯の南西稜の偵察のためトレッキングのグループも連れて子梅山を越えている。峠に一時間ほ



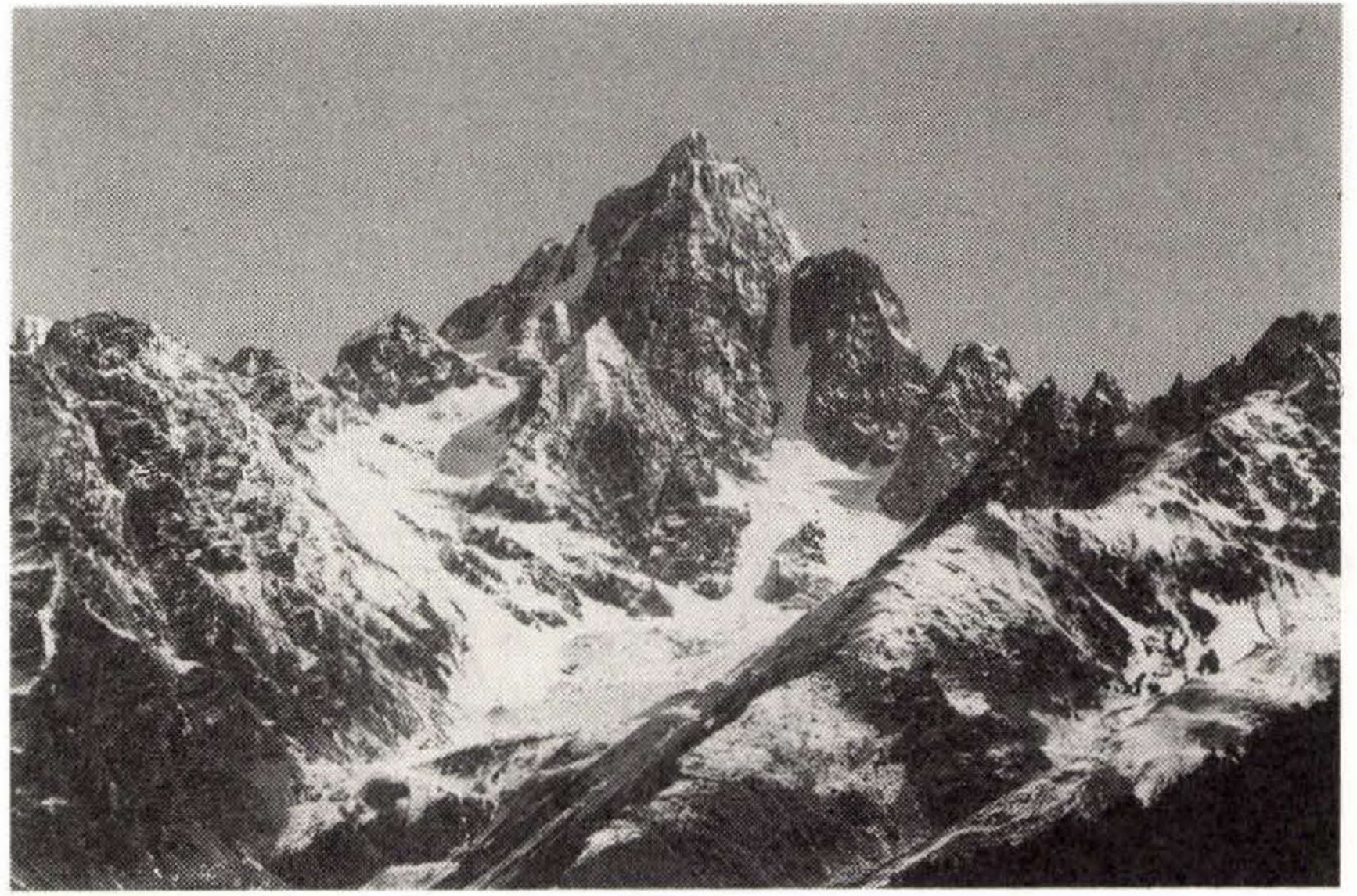
チベット族の娘さん、人なつっこい

どいて四時頃下山、バター茶とチンコー酒で祝盃を上げる。

四月七日も快晴。木尙さん一家の暖かい見送りをうけて早立ちする。起床前の準備、朝食の用意等、実に時間が正確で改めて生活の規律を感じさせる。また来て下さいと本当に好意のこもった言葉に胸が熱くなった。この日は新都橋から塔公草原まで足を延ばし、夕刻もう一度Lomo-sheを写真に収めて康定に戻った。

4 七色海と蓮花夕照連山

四月八日、好天が続く大渡河沿いの町村は春の盛り、麦の緑、菜の花の黄、桃と李(すもも)



連華夕照連山の一峯 (I)

の花が段丘にやわらかい彩りをそえる。四、二
九四メートルの折多山峠の冬の世界から、僅か
三時間で三、〇〇〇メートルを下って大渡河の
ほとりに立てば、フェーン現象か、熱い風に汗
ばみ、日陰を探す。見上げる岩峯群は昼過ぎに
なれば湿った空気にかすむ。炉定から康定、そ
の南北にかけての大渡河右岸の地域には Lomo-
she があり、谷をはさんで北側の七色海への谷
筋の左岸に岩峯を連ねる蓮花夕照連山はクライ
マーの興味をひかずにおかない鋭く個性的な山
である。すでに貢嘎山 (ミニヤコンガ) 国定公

園の一部として海螺沟とともに観光開発が進め
られている康定の北側の七色海、木格措 (標高
三、七〇〇メートルの湖) の東側にこの連山は
位置しており、天気恵まれれば、康定から一
時間のドライブで対面できる。針葉樹林に囲ま
れ青く澄んだ水面に映える鋭峯はその名前にふ
さわしい。が、まだこの山に挑んだ記録は寡聞
にして知らない。高さをもって尊しとしないな
らば魅力的なピークは数多くある。

二〇世紀の初頭、打箭炉 (康定) を基地とし
てカム地方 (東チベット、西康省) を探査した
ヨーロッパの先人達、この地域の地形の複雑さ、
天候の不安定さ故に間近にある山に気がつか
なかったり、位置関係を誤ったり、また呼称がま
ちまちで第三者にとって、記録の上で彼等の足
跡を辿り、山塊を特定することは極めて困難で
ある。そんな状況は今日でもさして変わってい
ないようだが、今回の旅で Lomo-she とともに、
蓮花夕照連山、折多山連峯を写真を撮り概念を頭
に収めることができたことは大きな収穫であった。
この日は七色海から木格措への途まで行き、
康定に戻り、そのまま石棉まで下る。

5 おわりに

七月九日、晴。フェーン現象が続き、石棉は
夏の暑さ。往路と同じルートを通って成都に帰
る。昼はいつも通り途中の町でとるが、「美人
豆腐」、「山菜豆腐」の大きな看板にひかれて道
端で料理している飯屋で車を止める。味のほど

は美人より山菜の方が上だった。前者は豆腐を
つぶして肉、コンニャクを交ぜてダンゴにまる
め、油で揚げた上にアンカケをかけたもの。後
者は雪菜 (たか菜の漬物に近い) と豚の三枚肉
をいためてスープを入れて少し煮たら、鷹の爪
と山椒を加えて、これを湯豆腐の上につぶり
かける。簡単だが旨い。四川と言えば麻婆豆腐
や担担麺など辛い料理として知られている。確
かに辛いのが、本場では唐辛子のみならず、山椒
をたっぷり使うのが特徴だろう。コンニャクを
食するのは四川と雲南の一部と聞く。最近では松
茸とともに日本への輸出商品になっている。

日々移動する旅の行程中、けっこう煩わしい
のは毎日の食事のことである。中国人の特性に
も通じるところがあると思うので、ガイドや運
転手の行動や嗜好からその傾向をまとめてみた
い。

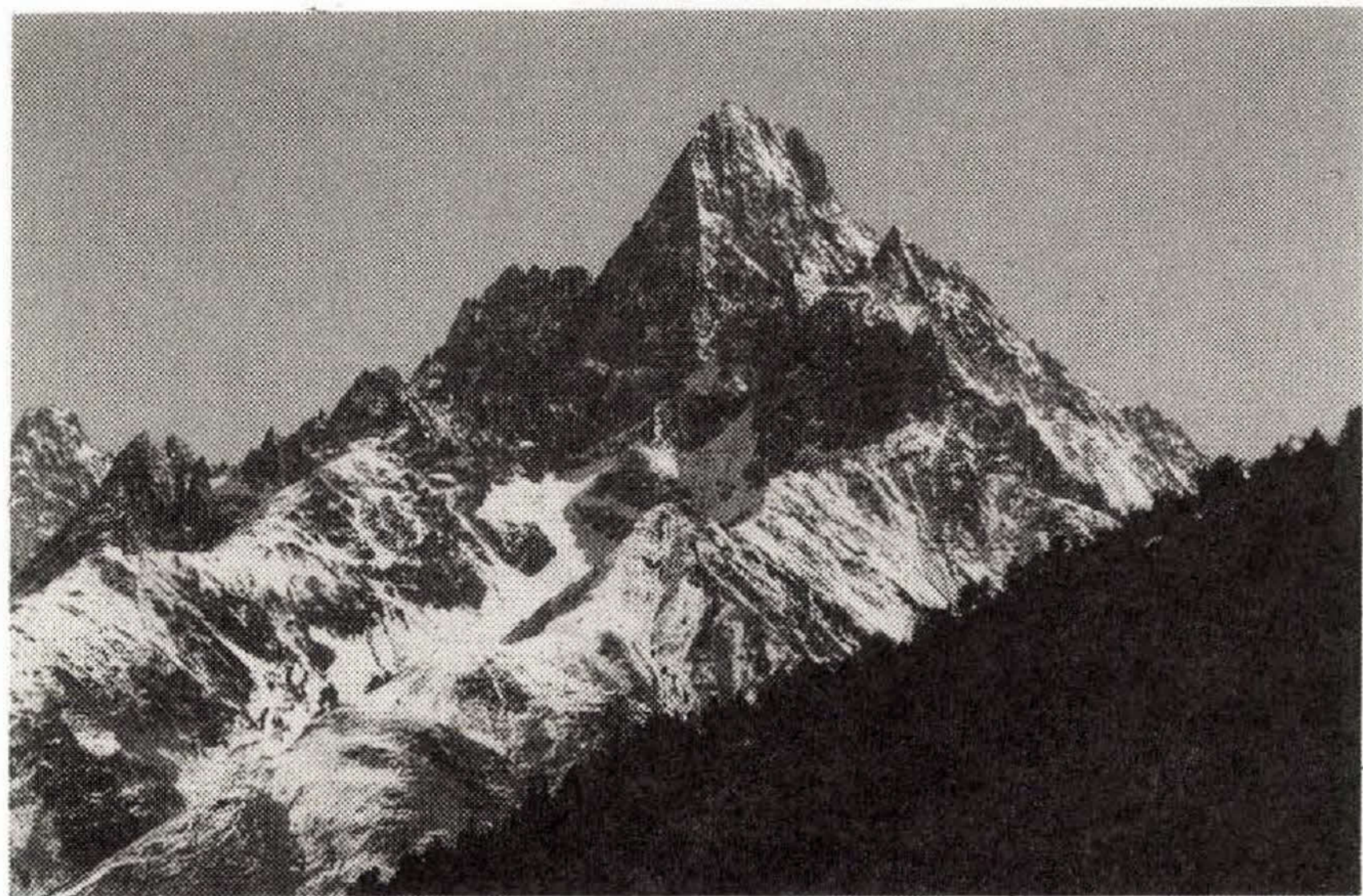
(1) 日々の行動予定の中では朝昼晩の食事を最
優先する。時間がないからといって昼食を車
の中でパンをかじって済ませるようなことは
しない。

(2) 必ず熱い湯と火を必要とする。山中でも民
家を探して湯と火を所望する。お茶葉は持参
している。中国人は冷たい食事はしたがらな
い。ドイツ人とは対極にある。

(3) 漢人の多くは食物に対する適応性の幅は狭
い。ガイドの毛さんはバター茶や、ツァンパ
には手をつけない。この性向は一九世紀末か

ら二〇世紀始めにかけて雲南、四川、東チベットを歩いた探検家の漢人ガイドについての観察にもあらわれている。チベット人は粗食によく堪えるが、漢人は鍋釜、食物を持ち歩き、毎回自分で料理するので、足手まといになると記している。海外華僑が中国人街をつくり、中華料理にこだわるのも、この延長線上にあるろう。

中国人の食事へのこだわり、執着にはいつも留意することが、ガイドと運転手と仲よく過ごすための最低の旅の心得だ。こちらの食事は豆腐や豆類、野菜をメインとし、ガイドと運転手



連華夕照 連山の一峯(II)

には自分達の好みのメニューを注文させる。町の飯屋で三人でビールを飲み、五、六皿の品に麵とご飯で代金はせいぜい五〇元(六〇〇円)ぐらいである。前述の宿・食事代、三人でUS\$

五〇/日に含まれる。こちらの文句にいやな顔をせず付合ってくれた毛さん、盛さんに感謝しつつ終りとする。

居室侵入罪？

久保孝一郎



法律の専門家でない私は刑法で「居室侵入罪」という用語は知っているが、「居室侵入罪」のそれはないかと思っている。住居も居室も同じではないかといえ、それまでのこと、山小舎となるとそうはいかない。東北新幹線が開通する二、三年前のことだから、もう時効だろうと思、私は敢えてみずから犯した標題の罪の経緯を山の想い出として以下に語ろう。

岩手山の姿は八甲田の帰途の車窓より私の脳裡に焼きついて、いつかは登らねばならないと胸に温めていた。そして以前に網張温泉から山スキーで登った三ツ石山か黒倉山からは、岩手山の白い頂上は私に「おいで、おいで！」と呼びかけていたような気もした。

さてその年の八月某日に私は、私より約二十歳若い針葉樹会員、上原利夫君を誘って、夜行

寝台で上野から盛岡に発った。行程は早朝に盛岡着。バスで網張温泉に行き、それからスキー場の二段リフトを利用し、途中お苗代湖に立ち寄り不動平経由で、岩手山八合目小舎に一泊、翌日頂上をきわめ、柳沢に下山帰京であった。あいにく出発の夜に台風襲来、翌早朝、福島駅では台風の通過待ちで長時間停車、途中の北上川の沿岸を通る鉄道には増水が迫り、強風で車体はゆれ、心細い思いをしながらやっと盛岡駅に着いたのは夜の六時すぎであった。駅の観光案内所で宿を探してもらい、その夜は盛岡市内に泊まった。

翌朝、網張温泉へバスで往く。途中の道路には風で吹きとばされた樹木の枝が散乱していた。温泉につくと二段リフトは上段が倒木のため運転不能とのことで、やむをえず下段リフト終点より登り始める。台風一過で天気は上々だが、

突発事故で予定が狂う。

お苗代湖は地図で想像したとおり、水の妖精でも住んでいるような幽邃（ゆうすい）な環境であった。途中、高山植物をみて、最終はゴルジュ状の中の急登で、不動平に出て、それより緩降して八合目小舎に到着する。

立派な大きな小舎で、前に水場がある。夏山の最盛期なので、途中で人を見かけなかったが、小舎番や他の登山口からの登山者で人気（ひとけ）はあると思ったが、全然それがない。思うに、あの台風で小舎番は里に下り、一般登山者は入山を見合わせたのだろう。だが入口の扉は閉鎖されておらず、らくに入ることができた。時刻は夕方五時頃だったと思う。

さて炊事を終り眠る準備にとりかかり、毛布があるだろうと周辺を探すが全然みつからない。夏のシーズン中で、小舎は大きいし寝具をあてにしてきたので、私たちはその用意をしてこなかった。さては小舎番の居室に格納されているかと推定したが、この部屋には折れ釘に南京錠が掛けている。夏山とはいえ台風後の強風で、立派な小舎だが、風通しは良い。このままでは安眠おぼつかなく、明日の登頂も老人にこたえる。せめて数組の寝具ぐらい眼につく処に出して置いてくれればと、小舎番をうらんで頭に来た。その逆上の気持が私の指をして南京錠にふれさせた。そうしたら簡単に折れ釘が抜けてしまった。室内をうかがうと奥に毛布が山積みされており、その手前には小

舎番の布団（ふとん）が敷きっぱなしになっている。これは良い案配、なにも奥の毛布を引き出すこともなく、上原君を誘ってこの布団に同衾（どうきん）することにした。

ひと眠りして夜中に目ざめた。再度の眠りに入るまえに、かすかに戸外の足音がコツコツと聞こえてきた。まさか夜なかに小舎番が帰ってくるとは考えられない。私の妄想であればと祈るような気持で眼をつむっていると、その音は段々と大きくなって、さらに入口の扉をあける音がした。私の心配が現実となってきた。このうちは小舎番に無断侵入をこっぴどく叱られ、私は年甲斐もなく、土下座して平謝（ひらあやま）りに詫（わ）びなければならぬと覚悟して、一応は狸寝入り（ねいり）をきめこんだ。その人物は小舎の内部の使い勝手を熟知したかのごとく小舎番室の扉をあけた。私は小舎番氏に間違いないと確信した。しかし彼は開口一番怒声を発することなく、ライトで私と上原君の顔を照らし廻して、声を掛けるでもなく静かに部屋を出ていった。私も上原君と打ち合わせもなく以心伝心で狸寝入り戦術に出たのが成功した。ここで下手（へた）に互いに口を利いてはまずい。その後、彼らは小舎の片隅みで横になって静かに休んでいたようだ。思うに彼は小舎番氏とは旧知の間柄で久闊（きゅうかつ）を叙（な）したかったのではなからうか。そこに彼とは未知な私たちが眠っていたので、驚きと共に安眠を妨げてはと配慮した

のではなからうか。

若干の時間をおいて、また登山者が三々五々入舎して、夜のあける間を過ごしていた。なかにはバーナーをつけて炊事をしている者もいたようだが、総じて静かに暁明を待っていた。合計十人程度にはなっただろう。そして夜明けと共に彼らは登頂へと出発して行った。その後、私らはまんじりと熟睡もできずに体を横たえ、他人から顔を見られたくない思いで、皆の出払った後に起きて、部屋をしめ折れ釘をさして頂上に向かった。この日も快晴だが強風で眺望はよかった。久恋の頂上に立って、やれやれの思いをした。帰途また小舎に立ち寄り、南京錠の掛かっているのを確かめ、一人一泊寝具付き千円と自己算定し、千円札二枚を扉のすき間に差し込んで、これで無罪放免とばかり清々した気持で下山できた。

（後記。この山も日光の男体山のように、夏は暑いので、夜に麓を出発し、朝を頂上付近で迎える習わしになっているのではなからうかと推察した。）

——平成六年七月二三日記・都内病院にて



飯豊(いいで)山の妖怪

そして捲き路はあった

一、はじめに

私は、平成五年八月六日午前十時十分頃、福島県川入部落からの飯豊山登山道の途中、芝平と横峰小舎跡の間で狭い登山路を下山者に阻まれ、その傍のかすかな踏み跡を登高中に転落し、再起不能の傷を負った。その原因は私の幻想による判断ミスであったと自覚するが以下はその経過である。

二、飯豊山への憧れ

十数年まえに日本山岳会本部の技術研究会と越後支部の共同主催で、新潟県、二王子神社社務所で合宿し、二王子岳スキー登山をした。その時の頂上からの眺望で、三月末の残雪の豊富な飯豊山塊を、手前が北股岳、枳差(えぶりざし)岳、遠くは飯豊山本山と御西岳を眼にし、生前一度は本山と最高点の御西岳に登りたいと思っただ。

また、平成五年五月には、一橋大学同期生会で磐梯熱海に一泊後、翌日若松市内を観光、途中の旧藩校跡より眺めた本山と御西岳の白い稜線は、今年こそ来いよ呼びかけているかに思え

た。

三、老人と山——登山の準備

老人になると、余生を大切にしたい気持ちと、また、逆にこの余生を自分のしたいこと、やりたいことのために燃え盡きさせてもよい気持ちと併存するようだ。私は、この山行のために、仮りに誰か反対しても(私の家族は私の自己責任のもとに許しているが)それを拒否しただろう。そして私の昔からの山岳仲間間で強力な登山家であった山田亮三、根本大の両君はすでに没し、私は自分の生存年齢不足を感じない。ただし不具の余生は送りたいなく、この点で私には最悪の結果となった。

登山計画は八月上旬出発

第一日 福島県側の最終部落の川入民宿泊

第二日 地蔵山経由切合小舎泊

第三日 飯豊山本山に登り御西岳往復、頂上

小舎泊

第四日 遠路、山形県側の飯豊温泉に下山

第五日 帰京

このため六月半ば松阪屋で開かれる夏山案内

所で最新情報を得、頂上小舎では食料・寝具があてにできないこと、また七月下旬某日は宗教的行事の特定日の故か、山が混むので避けるよう助言を得た。そこで半シユラフと不時の用意にツェルトを持参することとした。

また、訓練として、五月に同行者・奥村一郎君と奥多摩・鷹ノ巣山(高度差一、一〇〇米)を、六月に小林茂雄君と丹沢・檜洞丸(ひのきぼらまる)に行った。

そして七月針葉樹会総会で山崎君より「飯豊山は尾根路でも沢の底を歩いているような感じのする処がある」との話を聞き、捲き路を利用できればいいなと独り思案した。これが結果的に私の幻想の原因となった。

四、幻想行進曲——悲劇の発生過程

八月六日、前日より入泊した川入民宿を六時半に出発、登山口まで二十分、七時同処出発する。十時に芝平の標識点に到着。その間に前後した登山者十五、六人、すれちがった下山者は三、四人あったろうか。そして山崎君の指摘した「沢の底のような感じのする処」すなわちV字状の岸壁が左右にせまり、その間の登山路は人ひとりやっと通れる狭さで、岸壁の斜度は急で捲けるようなものではない。そしてその底が終る処には段差があって、跪(ひざまづ)いて上がらねばならぬ程だった。

さて、標識付近に右に入る小路があって、その先に「水場あり」の小標識柱が見えた。これ

が後で判明したことが、横峰小舎跡への尾根路を迂回する捲き路の入り口であったのだ。だから「横峰小舎跡へ至る」と書き足してあれば、私はこの迂回路を選び、当然今回の悲劇的事故は防げたはずだ。

そこから十分、らくに人のすれちがえる幅の広い路を上がると、第二のV字状岸壁にはさまれた狭い路となった。そしてその入り口で、黄色い生地(きじ)に胸に麻雀の一品(イーピン)の黒の模様のついたTシャツを着ている中肉中の背の中年の女性登山者(オバサン)と対面した。「邪魔だな。早く私の方の幅広の処に下りてきて、私にその入り口をあけてくれないか」と私は内心思った。

私がスモーカーだったら、丁度よい一服休みだとそこへ腰を下ろして彼女の通過するのを待っていただろう。また私のその時の気分が「気さくな社交家型」であれば、彼女と山の情報交換の会話をし、入り口をあけてもらうよう頼んだらどうだろう。

本来、交通は上り優先のはずである。仮りに彼女の同伴者が後続してくるなら、彼女から先に私にその旨を伝え、待つように頼むべきだ。私はまた私の独断で、「一刻も早く飯豊山頂の自然の神性に直接対面したい。そのためには中間的存在の彼女を無視または排除しなければならぬ。」私は七十余年の人生経験でこの時ほど登高意欲と敵愾心(てきがいしん)に燃えた

ことはない。私はさらに彼女に一米以内の範囲まで近づいて、相互に会話なく睨みあった。彼女は入り口をゆずる気配はさらさらなく、右手で岸壁をつかまえて頑張り立っている。私はこの時、飯豊の神様は悪鬼をつかって女性(にょしょう)に化身(けしん)させ、私の登高意欲をテストしていると幻想した。私はこのテストに合格しなければならぬと思い、ふと彼女との睨み合いの視線をそらして、見上げると左側の岸壁の約四米上に、かすかな踏み跡があるのを発見した。それは三十センチ米ほどの短い竹箠が連続して折り曲り、人か獣の通ったことを示している。そしてその約二米上は雑木帯で、そこに入り込めば木につかまりながら無事通過できるだろうと目算をたてた。そんな無理をしなくても、一休みして、一般登山路を通った方が安全で時間的にも早く進めたらうに、私は山の神に登山者の資質を試されるために選ばれた者だという一種の選民思想の優越感にとりつかれ、また、最後は神が良い結果をもたらしてくれるだろうという予定調和的楽観論をいだいた。だから後続の奥村君には決して捲き路に入らず、一般登山路を通ってくるように声を掛ける積もりでいた。

そう決意すると私は斜度六十ぐらいの岸壁を、約十キロのリュックは気になるが、神の加護のあることだし、三点確保なら怖(こわ)くないし登り始めた。はじめのうちは適当なホール

があった。だが踏み跡に近づく処で右手のホールドに窮していると、前述の折れ曲がった竹があった。ふだん慎重な私は、たとえば登山路にあるナイロン・ザイルはかならず一応ひっぱって安全性を確かめてきた。また、私の性格は、今西、西堀氏ら三高・京大山岳部の伝統である「石橋を叩いては渡れない」式の敢行主義とは正反対で、「石橋は叩いても、自信がなければ、渡らない」式の絶対安全主義、そのためにはピークハントを狙わず、山の自然の雰囲気染まってくるだけで満足との考えで永年登山してきた。

しかし、この時ばかりは神のホールドとばかりに全く何の懸念もなく掴んでしまった。そして全体重をかけるまえに、この竹は折り切れて、私は頭を下に背中を岸壁に滑らせて約四米落ち、その間、頭をうためよう両手をぐるぐる廻していた。反対側の岸壁にのり上げるようにして体は止まった。その際に首をうって太い神経の筋が二本切れたような感じがした(頸椎の第六、第七がずれたとの医師診断が後で判明)。また、その岸壁の下部に倒木があって、その枝の切り口に腰をぶっつけたようだ「久保さんが両手をぐるぐる廻しながら眼の前に落ちてきて驚きました」とは奥村君の後日談である。

外傷も内、外の出血もなく、意識はしっかりしていたが、ひどい打ち身であった。その結果は、約一年後の現在、右足マヒによる車椅子生

活と背中、腹、腰から足のつま先までの神経痛
症状（シビレ、ホテリ、ツッパリ）に悩んでいる。

五、事後処置——そして捲き路はあった

転落場所は狭い路で、私は首が痛く、足が動か
かず一步も歩けない。奥村君一人ではどうにも
処置つかず、そこへ若い男女が下山してきて、
その応援で私は幅広い路の傍に寝かされ救出を
待つことにした。

下山者がくると、そのつど救出依頼の伝言を
した。そのうち一時間ほどで、下から携帯電話
を持参のNTT職員が登ってきて、早速、村役
場と警察へ連絡してくれて、私の自宅には午後
○時半頃には役場から入電したそうである。そ
の電話のやりとりから、すぐ救援隊が編成され、
正午頃には出発した模様である。そして午後二
時半頃にはNTT職員と救援隊の電話交換で、
救援隊は芝平から前述の迂回路を通過して横峰小
舎跡にでて、それから一般登山路を下ってくる
との情報が入った。午後から雨が降りしたが、
ツェルトと雨衣で濡れるのを防いだ。午後三時
救援隊が現場に到着、ヘリで下ろすが担架で下
ろすか現場協議、郡山の自衛隊にも連絡とった
が、この雨天でヘリ出動不能となり、三時半よ
り担架で下山開始、途中で暗くなっていたが、ライ
トで無事に午後七時登山口に到着、そこには救
急車と東京からマイ・カーで急行した息子が待っ
ていた。

（平成六年七月二十五日、都内の病院にて脱稿）

この頃の夏の山登り

山本健一郎

このところ夏にはすこしまとまった休みがと
れるのを利用して、テントを担いで何日か山に
入ることにしている。そのきっかけとなったの
は昭和六一年の夏に佐藤さんにつれられて三伏
峠から塩見岳に登り、蝙蝠を往復してから間の
岳、北岳をこえ広河原におりた山行だった。テ
ント担いでなんてとてもきつくてかなわないと
思っていたが、初日こそこたえたけれど、すこ
しずつ調子がよくなりなんとか佐藤さんについ
て行けたので自信が湧いてきた。テントで行く
なら夏の北アルプスだって敬遠することはない、
小屋がいくら込んでも関係ないんだと気がつい
て、早速テントを買い入れた。

昭和六二年の七月には手始めにテントがいい
と吹き込んだ勤め先の仲間二人をつれて仙丈岳
にでかけた。カールの中のテント場はなかなか
よくまず試運転は成功である。そこで八月には
念願の赤牛岳に登るべく、新穂高温泉から笠が
岳にのぼり水晶、赤牛から奥黒部ヒュッテに降
りる計画を立てた。しかし荷物もずいぶん重く
なりそうで一時はテントに泊まり小屋で飯を食

わせてもらおうという軟弱なプランも考えた。コー
ス上の小屋に電話をしてみると、どこも食事だ
けでも食べさせてくれるというのではないか。
これにはぐらついたが、誘惑を退けどのくらい
のことができるか試すことにし、できるだけ荷
を切り詰め笠の登りに挑戦してみた。

この時の荷物は一五kgくらい、朝四時に新穂
高温泉を出て稜線に十一時半、笠の頂上には一
時についたからまずまずのペースだった。この
後は順調に三俣蓮華までいったが、台風のため
赤牛には登れず鏡平から新穂高温泉に戻ってし
まった。

それで翌昭和六三年には、また赤牛にでかけ
た。鏡平から双六に登り、雲の平に二泊して岩
苔小谷にいこうとしたが、この日はあいにくの
雨で小屋で仕入れたビールを飲んですごした。
翌日幸い天気が好転しそうなので雨が残る中テ
ントを畳み午前四時四五分に歩き出した。祖父
岳から岩苔乗越を通り水晶の頂上に着く頃には
日が差してきたのでテントを広げ乾かして先に
進んだ。北アルプスとは思えない人気のない稜

線を気分よくあるいて待望の赤牛岳の頂上に着き大展望を楽しんだが何と云っても目の前の薬師岳の姿が印象に残った。一時に赤牛の頂上を辞したが、一時間歩いて高度は下がらず谷を隔てた烏帽子岳と同じ高さのところにいるので焦ってしまう。そのうち急な下りをはじめ、岩場、樹林帯、泥の道、倒木などいろいろな下りの標本を集めたような下降を体験して小屋に着いたのは五時頃だった。ここまでたどり着いてもまだ先がある。翌日は黒部湖に沿って平らな道を歩くだけと思ったらおおまちがい、支尾根を何本も乗り越えては降りるの繰り返しで梯子の登り降りもあるし、大きい支流はバックウオーターにそって谷のおくまで入って出てくるの繰り返しで正味六時間は歩かされ、テントの代わりにゴムボートを持っていくほうがいいのではないかとおもった。

二年続けて北にいったので平成元年には南に行こうということになった。悪沢に登ろうという声が多く二軒小屋まで行ったけれど、台風が接近してきたので、帰りのバスが不通になるのを懸念して静岡に舞い戻ってしまった。くやしので十月に出直し榎島から千枚小屋に泊まったが恐ろしく寒い夜で小屋の引き水が凍ってしまった。この日立山で遭難があったとは後で知ったが、翌日は快晴で悪沢と赤石の頂上で雲一つない眺望に恵まれ、北アルプスは南部の槍穂高も真っ白なのんびりしたのおぼえている。

平成二年は光岳に行こうという威勢のいい意見が出てきた。まだ便が島の小屋もなく寸又峡から四八キロもの林道があるのは気がすまらずにえきらない返事でごまかしていたが大勢抗しがたく押し切られてしまった。静岡から寸又峡の林道入り口までタクシーにのり歩き出したのが午前八時、正味四時間炎天下の林道を歩いたところ、大無間山の登り口の近くでヒッチハイクに成功柴沢の登山口まで送ってもらった。この間車で一時間以上かかったから、歩けばまだ六〜七時間はかかったろう。次の日は柴沢から百俣沢の頭までが退屈な長い登り、その先で視界が開け光岳の山容に接することができ、這い松と白砂の尾根を一步一步目指す山に近付いていく感じがなんともいえずすばらしく、今思えば出しても胸が躍る。この山に登るなら南から登るべきだろう。三日目は聖平まで、水がチョロチョロとしか流れていないのにびっくりし、四日目に聖に登り榎島まで、そして最後の日はマイクロバスが運行していないのでまたまた畑雑ダムまでの林道歩きとなった。

平成三年、同行の皆さんが南にとりつかれた今年もいこうという。それも蝙蝠岳にいきたいと言う。赤牛岳に蝙蝠岳に唐沢岳なんて盲腸みたいな山ばかり登っているとそのうち山の中で盲腸炎にかかりヘリコプターのお世話になると言いたくなる。だけど敵は一人ではテントを持っての山行はできないだろうとの読みがある

ので強気で押してくる。それでまた三伏峠から塩見に登り蝙蝠を往復した。そして天気が崩れたので熊の平から間の岳の腹をまいて農鳥をこえ大門沢を降りたが、間の岳の巻き道は大変気分のいいところだった。蝙蝠岳に二度登った人はそうはいないだろう。

平成四年はさすがに北アルプスに行こうと言うことになった。赤牛から見た薬師岳が印象に残っていて立山から五色をとおり薬師から有峰の降りた。室堂の変わりようにびっくりし、昭和二八年以来三九年ぶりに、友田さんの碑にもうで薬師の頂上をふんだ。あの時は五色を出てから双六までの間、上の岳あたりで京都大学の四人のパーティーにすれちがっただけだったが、薬師から有峰までの人出は相当なものだった。太郎兵衛平から下は切れめない人の波が続いていた。綺麗で良かったけれど人が多く、歯応えがなかったと言るのが皆の感想だった。

それで平成五年にはどこかほかの地域に言うことになり、飯豊山にかけた。弥平四郎からの登りは予想通りのいい道で三国山まで簡単に登れ、飯豊本山、最高峰の大日岳に念願の杖差岳にも登れた。この年の夏は雨が多く初日と最終日は雨に降られたが、運よく稜線を歩いている間は晴れて素晴らしい眺めを楽しんだ。残雪と高山植物が豊富で、北の股岳以北は人影もなく静かな山歩きができた。とくに杖差岳は印象に残る良い山だった。

二年南アルプスにご無沙汰するとまた行きたくなる。平成六年は南アルプスに行こうと言うことになった。私は三伏峠から悪沢の間を歩いている。聖と赤石の間を歩きたいという希望もあって三伏から聖までという計画になった。

樺島から聖に登るのは日当たりがよく暑くてきついし崩壊で畑までバスが入らないらしい。ひきかえ三伏峠の登りは午前中涼しく登りやすい道だから、こちらからのぼろうと計画をたてているうちに林道が伸び終点から三時間ほどで三伏峠に登りつけることがわかった。そこで鹿塩に泊まり、初日は林道をタクシーで一八〇〇mまで登り三伏峠から高山裏まで頑張り、二日目は百間洞まで、三日目は百間洞から聖をこえて遠山川の便が島小屋まで降りることにした。還暦記念にできるだけ頑張ってみようと欲張ったこのプランは、連日九時間半、九時間、一四時間を行動することになり不評だった。連日の猛暑に山の上も暑く、シンガポール顔負けの激しい雷雨に毎日おびやかされ、高山裏では雹まで降りすぐ近くに雷が幾つか落ちたし、聖岳の上から便が島まで高差二〇〇〇mのくだりもなかなかのもので、暗くなりかかった道を急いでいたら微かに煮物の匂いが漂ってきて小屋はもう近いと励まされたのもなつかしい思い出である。テントをかついだこんな山行があと何年続けられるかわからないが、とりあえず今夏は東北の朝日連峰か、農鳥岳から転付峠のあいだを歩

いてみたいと考えている。上の廊下とか北鎌尾根もいきたいのだが例年一緒のメンバーを私が連れて行くのでは少し心もとないのでのこっている。また北海道の山も行きたいがそこまで手を広げると收拾がつかなくなるので今のところ

本州の山にかぎっている。いまの調子なら、後十年くらいはテントでの山行に、パートナーに迷惑をかけずに応分の荷を担いで付き合えるのではないかと考えているのでよければお誘い下さい。

お正月の屋久島登山

「お正月の山」その後

倉知敬

一九九四年元旦。満員の淀川小屋は早朝から出発の準備のパーティーで騒然としていた。あわただしい雰囲気の中で雑煮の朝食をとってから、ぼくらはまだ真暗闇の午前六時、星のきらめく快晴無風の中、宮之浦岳を目指して出発した。

中島寛、佐藤活朗、それにぼくの三人は、一昨日初めての屋久島登山にやって来た。その日は宮之浦空港到着後、中島さんの会社（宝幸水産）の販売している「屋久島の自然水」の水源地や工場を見学したあと、全島一周の観光をして、この真冬でも驚く程温暖で、楽園そのものの美しい島を見物した。昨日は島は一転して黒い雲におおわれ、半日程雨もようだったが、ぼくらはゆっくり宮之浦のホテルを出発し、レンタカーで安房川ぞいの林道の終点まで入った後、小一時間山道をたどって淀川小屋へ到着、元旦

の登頂にそなえたのであった。

三日間程の山行日数で正月の屋久島登山をすと決まった時、どこからどの山へ登る計画にするかいろいろ検討したが、積雪の状況や冬の天候の具合など肝心なところがよくわからず、結局のところ一番確実安全な一般ルート経由でキャンプを一つ設け、そこから最高峰の宮之浦岳往復、積雪等条件が良ければその先の永田岳まで足を伸ばす、ということにした。ところがいざ屋久島に来て見ると、今冬は例年になく温暖で殆ど雪もなく、無雪期と同じく麓から日帰りで宮之浦岳に登れそうだが、ということがわかった。まあテントやアイゼンはいらなそうとはいえ、確実に登頂するため、ぼくらは前述の淀川小屋に一泊し、そこから一日行程で頂上往復を試みることにしたのである。

木の根がからみつく樹林帯の山道をしばらく登ると、灌木におおわれた尾根筋に出、折から地平線が赤く輝いて初日の出となった。まもなく湿原の名勝地、花之江河に到着、その先は尾根を左右に捲く坦々とした道を行く。山道は同時に水の流路ともなっていて、それがすっかり凍りついていて非常に滑りやすい。あたりは笹やシャクナゲの散在する草原もようとなり、ところどころ大きな露岩が突出している。その内巨大なものが山頂を形成しているといった感じだ。翁岳の横を通るまでに、四つのそうしたピークを捲いていく。それから波状につながっている稜線を、山頂とおぼしき高みに向かってたどって行くが、さて頂上に着いたかなと思うと、その先にまた同じ様な稜線がつづいている、といったことを二、三度くり返した後、やっと宮之浦岳山頂に到達した。

四周を見回すと、やはりすべて海に囲まれている。麓の人家は全く見えず、連なる山並の彼方は濃紺の平面となって地平線に至る。文字通り雲一つない快晴の下、まったく冬の山とは異質の南国の青い山々は、いかにもおだやかなたずまいを見せて横たわっている。

登って来た方の対面には、もう一つ大きな幅広い山があって、それが永田岳であった。まだ午前十一時、永田岳往復を試みることにする。幸い稜線はあまり深く切れ落ちていない様子ではなく、再びうねった様な草原を坦々と歩くばかり

りである。頂上へつづく最後の登りはややきつい登りではあるが一気にそれを登り切り、頂上直下のチムニー状の岩場をフリクションを頼りに攀じると、巨岩の累積した頂上にたどりついた。

目を彼方へやると、はるか下の青い海岸に面して永田の町が望まれ、一昨日そこに立って山を見上げた永田川にかかる橋がよく見える。いかにも屋久島の山に登ったという気分になった。山頂から北側へは、岩稜をまじえた急峻な障子尾根が連なっていて、独特な景観を呈している。滑らかな花崗岩が積み重なったような特徴ある山容は、いかにも南国の高山の趣きをただよわせ、これこそ屋久島の山のエッセンスだ、と思わせる雰囲気を感じさせてくれた。

帰途について間もなく、山はガスにつつまれた。それは、ぼくらが極めて稀な好天の時期に、運良く山を満喫するチャンスを与えられたことを思い起こさせてくれた。再び坦々と来た道をたどりながら、意外に長い距離を歩いて来たことに気が付き、疲れはてて午後四時過ぎ、小屋にたどりついたのだった。

以前、冬山十年の記録を「お正月の山」と題して簡単にまとめたものを会報に寄稿したことがあった（一九八八年、会報第七十一号）。前記の屋久島行は、ぼくにとってその後の「お正月の山」の六年目に当り、冬山はつごう十六年勤続となった（今回のはいささか冬山とは言い難いが）。ついでにそれ迄の五年間の正月山行

の様子を以下に簡単に紹介させて頂くことにしたい。

一九八九年。〈船形山〉 同行、中島寛、柿原和夫。

三千米級の雪山、という正月山行の基準にしていた条件にははずれるが、厳冬期の東北の山をスキーで登るというのも魅力的で、たまには趣向を変えて距離のある山岳スキー行を試みることにし、船形山を目指した。

暮れの三十一日、定義温泉に一泊。元旦は宿の目前にある定義如来神社に初詣をすませてから出発。四駆車パジェロを駆って雪を蹴散らしながら林道を行けるころまで行って、後白髭山につながる広い尾根をシールを付けて登り出す。樹林帯の登行は思った程早くは進まず、後白髭を越えた所まで行くつもりが時間切れで、その手前で幕営することとなった。

翌二日は雲の多い空だが、まあまああつた天気。起伏のつづく長い尾根は時間ばかり喰ってはかどらない。やっと泉ヶ岳からつづく主稜線も到達して蛇ヶ岳に着いた所で、頭を雲にかくした船形山は指乎の間に望めるものの天気具合も心配であり、無理をせず引き返すことにした。丁度蛇年であり、縁起の良い山に登れたことで満足する。スキー滑降は下手でも結構早い。アツという間にテントに着いた頃には天気が好転していたのは皮肉だった。

一九九〇年。〈塩見岳〉 同行、佐藤活朗。

元日の内に帰らねばならぬ佐藤君の都合に合わせ、暮れの二十九日夜行で出発する。塩見岳はぼくにとって、大学一年の時初めて経験した冬山だったので強い印象がある。特に三伏峠への登りがただきつかった記憶が残っている。未明の伊奈大島駅から、相乗りのタクシーで大樺小屋手前の橋まで行き、凍った沢筋の林道を歩き出す。三十年前の記憶はまるでなく、まったく初めての所へ来たのと同じである。ただ峠への急登は思った通りだ。しかし、さほど重くもない荷物のせいで、苦しむほどのこともなく三伏小屋にたどりついた。大きな無人小屋の中にツェルトを張って寒さをしのぐ。

明けて三十一日。雪が降っている。行ける所まで行ってみるつもりで、視界のきかない中、かすかなラッセル跡をたどっていく。その内雲が切れ視界も広がって来たので、天狗岩が見えたところで登頂を決意する。樹林帯を抜け出ると、もはや風雪もようですらい登りとなったが、ひたすら登る。途中からひざが痛くなった佐藤君は次第に遅れがちとなる。

午後一時半、どうやら頂上に到着。塩見岳と書いた標識板以外何も見えない。さっさと下って、また長い道のりを戻すが、帰りの尾根道は結構登りも多く時間が喰われるばかり。しかし、日没少し前から晴れ上がって来て夕焼けとなった。赤く光る仙丈方面の山肌がきれいだった。暗くなっても残光でかすかに見える道をたどり、

午後五時半、小屋に帰り着いた。

一九九一年。△西穂高岳▽ 同行、佐藤活朗、引地真夫妻。元気な引地君が参加するというので、当初は奥穂南稜を登るつもりで出掛けたが、年末間際かなりの雪が降った状態だったのと三が日の天気予報が悲観的だったこともあって、上高地の帝国ホテル前で考え直し今回は西穂往復に止めることにし、梓川を渡る道の方へ曲がった。それが暮れの三十一日の朝、快晴で山はおだやかな姿を見せている。樹林帯の道は不安定な雪におおわれ、先行者がいるといえども足をとられる。午後二時頃、西穂小屋の少し手前に幕営。午後からは雲が増え、ラジオは低気圧接近を伝えている。

明けて元旦は終日雪が散ら付き、ガスに閉じ込められ昼過ぎから独標手前まで散歩に出る。二日、六時過ぎ出発。独標の登りにかかる辺りからはガスの中で視界なく、小雪が吹きつける。しかし先行者あり、トレースがわかるのでどんどん進む。独標の次のピークの下りでザイルを出し慎重に下った。ほとんど何も見えないまま、先行パーティを抜き、九時半頂上着。下る頃になつてやっと視界も広がり楽に歩けるようになった。帰幕後直ちに撤収、その日の内に帰京した。一九九二年。△木曾駒ヶ岳▽ 同行、前神直樹。実は鹿島槍の鎌尾根を登るつもりで、十二月二十九日信濃大町から西俣出合まで入り、幕営した。前夜からこの冬初めての大雪となり、

歩いている最中もシンシンと降る雪はどんどんと積もっていく。途中で追いついた先行パーティは、深いラッセルに遅々たる歩みで、横なぐりの雪が吹きつける西俣出合で立ち往生となつてしまった。そこでテントを張り一夜を過ごしたが、鎌尾根に取り付くためには更に深雪の北俣本谷の沢筋をたどることになり、いかにも新雪雪崩が恐い。翌朝、あっさりあきらめて引き返すこととし、ただそのまま帰るのも残念なので、あれこれ考えた末、帰りがけに簡単に登れそうな千畳敷ロープウェイ經由木曾駒登山をしていくことにしたのである。

冬の雪山に登ろうとしたら、木曾駒ほど手軽にできるところはあるまい。ロープウェイの終点から、宝剣岳右手のルンゼをつめれば、二時間程で主稜線に立てる。電車を乗りついでロープウェイの最終便にとびのり、その日の晩は千畳敷の山荘わきに幕営、翌朝起きてみれば何と快晴である。登山者のにぎわう中、硬く雪のしまった少々急なルンゼをゆっくり登り、最初に宝剣岳を、次に引き返して木曾駒を踏み、晴れ上がった空に白く輝く周囲の山々の景観を楽しんだ。

一九九三年。△鹿島槍ヶ岳鎌尾根▽ 同行、中島寛、寺島修（山岳部三年生）。

三が日の天気は良いという予報であり、積雪も例年より少な目と思われ、今年は何とか北俣本谷へ入れるのではないかと期待して、十二月

三十日西俣出合に向かった。午後二時過ぎタクシーで黒沢峠との分岐点まで入り、小雪が舞う中、大冷沢の林道をつめ、四時半西俣出合着、昨年と同じ場所に幕営した。

三十一日朝方まで雪は降りつづき、午前中はやや明るくなったものの降り止まない。午後になってやっと雲が切れ、夕暮れ頃より晴れ上がった。

午後二時半、鎌尾根末端まで偵察とトレース付けに出掛ける。谷には何段かの堰堤が連なっており、右岸沿いにそれを越えていく。ワッパが少々もぐる程度の積雪である。一番上の堰堤から先は左岸に土手状の高まりがあり、それをたどっていく。本流には固くなったデブリがあるが、沢筋広く安全なルートはとれる。少しずつガスに隠れた部分が上の方へ移動して、鎌尾根末端の対岸付近迄来た時には稜線近くまで見えるようになった。鎌尾根は所々ブッシュが出ているが、上部は殆ど真白、尾根筋は複雑に入り組んでいてどれが登路か見極めにくい、右の側壁は急峻に切れ落ちていて、その上端をたどれば間違ふことはなさそうに見えた。段々晴れ上がる中、扇状に取り囲んだ圧倒的な何本かの雪稜が頭上に姿を現したが、ほどなく薄暗くなり、ぼくらはそれを背に引き返した。

明けて元旦。五時五十分ライトをつけて出発。

殆ど無風で冷え込んでいたので天気は安定しているようだが、上の方はガスの中のもよう。きのうの引返点に着いた頃にはすっかり明け切っ

ていた。山は赤く輝いているが、上の方のガスがなかなかとれない。鎌尾根の正に末端のところで北俣本谷は極端にせまくなっているが、そこを急いでトラバースし尾根に取り付く。本谷のはるか上の方にはデブリがたまっている様子で、この横断は気持ち悪かった。

七時、尾根上を登り出す。樹林帯のヤセ尾根だが、雪がやわらかくズブズブともぐるので非常にやっかいである。これは思惑がはずれ、登攀は最後まで軟雪との闘いとなった。しかし、登る程に全天晴れ上がり、となりの東尾根の側壁は赤くキラキラと輝いて、誠に見事な光景を見せ、気分は上々である。ヤセ尾根は一段上部に行くと広い尾根に変わり、左側の布引沢へ向けて広い斜面となっている。通常は布引沢へ一旦入ってから取り付くのが登攀ルートとなっているようだが、今はこの沢は恐くてとても入れない。右側の急崖を見ながら、ほぼ稜上を忠実にたどっていくが、一步一步深くもぐる雪を固めながら足を運ぶしかなく、進行はまったく遅々たるものだった。

深いラッセルの単調なくり返し。三人交代で雪をかきわけて行くが、重労働の番はすぐ回って来て疲労は甚だしい。しかし、なかでも若い寺島君は重い荷物を負担している上に相当な馬力を発揮してラッセルの役を人一倍はたしてくれ、誠にたのしい。彼が居なかったら、多分登り切れなかったにちがいない。登る程に傾斜

が増し、尾根もやせて来て、軟雪との格闘にはバランスを保つ必要が加わって来て、高度感も結構ある。滑落してはたまらないので、途中からアイゼンを着けその上にワッパをはく。時々ピシッと音がして足元の雪面がゆれるなど、尾根上の雪全体がガバツと崩れそうな気配もあり、少々恐い目をした。

やがて、ナイフリッジ状の個所に来て、ザイルを結び合う。もうかなり上部だし、ここは固くなるのだろうと思ったが、相変わらず雪は軟らかい。中島さんトップで慎重に一ピッチたどってから、次のピッチはぼくが代わって左へ捲くが、急な斜面で足をとられそうになり、奇妙な具合だ。二ピッチでザイルはしまい、再び急斜面のラッセルが続く。あの上のコブまで一時間、などと頭で計算しても、実際にはその三倍ぐらいかかる仕末で、見る見る時間がたっていく。

主稜線が間近に見えるようになった頃にはもう夕方の気配で、そのうち陽は主稜線の向こうに沈み、あっという間に暗くなってしまった。ライトを出し、疲れた体に鞭打って、午後六時やと主稜線にたどり着く。流石に最後の数十米だけはアイゼンの刃が喰い込む程度の硬雪だった。その晩は込み合う冷池の冬期小屋で、ヒザをかかえて仮眠する羽目となった。

翌二日も快晴で明け、夜明けと共に赤岩尾根經由下山。すぐ左手にきのうの苦闘がうそのように思える穏やかな鎌尾根を眺めながら。

「火打山を滑る」

昭五一年卒 加藤博行

二千五百メートル級で、頂上から滑降が可能
な、すっきりしたスキー登山向きの山として、

「火打山」(二四六二メートル)には、以前から
行きたいと考えていた。信越国境の「妙高山」
(二四四六メートル)の北西に位置するこの山
は、日本有数のスキー場と温泉を広い裾野に擁
する妙高山に比べて、地味な存在だが、高度で
は妙高山を凌ぎ、五月でも雪のびっしりついた
白く穏やかな山容は、スキー登山の格好の対象
である。高校三年の夏(一九七〇年)火打山に
登って以来、漸くこのスキー登山が五月の連休
に実現することとなった。

今回の山行のパートナーは、この二年程「三
菱デリカ」で車による手軽で機動的な山行を共
にしている、前神氏と佐藤君(デリカのオーナー)
それに金子氏・兵藤君の五名である。山行の直
前、私自身は、ギリギリまでタイに出張中であっ
た。バンコックでは、丸子・中川両先輩と、同
じく東南アジア出張中の倉知氏・引地君と五人
で賑やかにタイ針葉樹会を催した。トムヤムク
ンを始めとするタイ料理に舌鼓を打ちながら、

大先輩のカトマンズ・トレッキングの話を楽し
く聞かせていただいた。

出張を半日早く切り上げて、四月二十八日の
夜行便でバンコックを発ち、二十九日の朝成田
到着。その日の夜行で妙高高原駅に向かうとい
う過激なスケジュールで、ともかく東京を先発
した(換言すれば私を置いて車で先に行ってい
まった。)四名に合流することができた。

妙高山麓を巻くように開かれた通路を駆って
笹ヶ峰牧場に向かう途中、あまりの残雪の少な
さに心配したが、笹ヶ峰から火打山に伸びる斜
面には雪がびっしりついてほっとした。本日の
予定は、火打山直下の高谷池まで登り、そこに
幕営して、できれば今日中にアタックし、高谷
池まで滑降することである。

笹ヶ峰で我々は車を捨て、堅く締まって快適
な雪面を思い切りよく歩き始めた。スキーは細
紐でトップをくくり、犬を連れて歩くスタイル
とした。灌木帯の所々に白いこぶしの花が、ひ
と際伸びあがるように咲き、その間を縫うよう
にして、スプーン状のカットが続く緩斜面を進んだ。

一ピッチ千米程して、妙高山と火打山を分け
る黒沢の渡渉地点にかかった。上流から敷きつ
められた雪の下からゴウゴウと雪解水が流れ、
春らしい雰囲気に満ちていた。スキーを抱えて
木橋を渡ると程なくして、トラバース気味の急
登を強いられる。「十二曲り」と呼ばれる火打
山に連なる主稜への登りで、西側斜面の為、十
分光が当たらず、クラストしている。ここを帰
りに滑降するのはとても気が進まない。

見上げるような急登を終えると尾根に飛び出
し、スッキリとした尾根道が続く、尾根の末端
には、水をたっぷりと湛えた乙見湖と笹ヶ峰ダ
ムが、残雪の山々と風景を画して望まれる。右
下には先程渡った黒沢が、豊富な残雪でスロー
プを形成し、ひんやりとした風が軽く吹きあ
がる。左岸を滑降している人が見え、我々も下り
の滑走ルートは黒沢と決めた。

最初からスキーをザックにくくりつけた金子
氏は、昔の金子氏のようにぐんぐん飛ばして、
我々四名はとても追いつけない。一ヵ月程前、
ストレスで入院していたとは思えない復帰第一
戦である。やがて金子氏に追いつく頃、目前に
たっぷりとした雪に覆われた火打山の全容が、
ブナの樹越えに現れた。ひと目ダウンヒルに相
応しいスロープが、ピークから高谷池に向かっ
て緩やかに伸びている。期待通りの雪質と、新
緑を射る陽光、あとはスキー操作の技術が、こ
の山行を決めると我々は思った。

少し早まる気持ちで富士見平から右斜面をトラバースして、雪原の中央にどっかりと三角屋根を降ろした高谷池ヒュッテを目ざした。

火打山滑降

幕営後直ちにスキーの準備に取りかかる。出発する十二時半頃には、あれ程眩しかった空が、曇り空一色となり、何とも頼りなくなってきた。頂上斜面には、もう間もなくピークに着く登山者の列が蟻の如く連なって見える。我々も今日中に登らなければ、またこの三月に登りそこねた至仏山の二の舞になる。

準備の出来た者から、次々と天狗ノ庭を経て頂上に向かった。「これ以上持って登っても意味がない」と、金子氏はスキーを途中にデポ。佐藤君が、シールでの登行でそれに続き、私・前神・兵藤が、スキーを細紐で引きあげ、各人各様のスタイルとペースで、登ること一時間半のっぺりとした火打山頂に着いた。

久し振りの残雪期の登頂に、やっと登れた実感がじつくりとこみあげてきた。日射しも少し回復して、残雪と黒いシルエットが見事にバランスする周囲の山々が遠望できた。妙高山は幾分ピークを傾け、裾野の広い外輪山を従えて、火打山と対照的な荒々しさを持つ。雪面に水蒸気を吹きあげる焼山も新鮮な印象で、その向こうに海谷山魂もせまり、雨飾山もそれとすぐわかる。朝からの長い登りで疲れは中々戻らなかったが、それぞれスキーを着け滑降を開始した。ザ

ラメ状で表面が軽くクラストしている雪質は、中級者(?)には申し分のないコンディションだ。頂上から暫くは、斜滑降キック・ターンを繰り返して、少し傾斜が落ちた頃、ボーゲンとシュテム・クリスチャンアをとりまぜて、滑り続けた。後に続いた上級者の兵藤は、さすが昔の長岡勤務時代に鍛えた技術で、雪面を巧みにとらえ、素晴らしいターンを見せている。

ピークから高谷池までは約三五〇メートルの高差で、一〇分も滑れば早くも天狗ノ庭の広い雪面に着いた。三七度の暑熱の街バンコックからの夜行フライトでの帰国、そして夜行列車での入山と、慌ただしく続いた二日間は、火打山スキー滑降で、漸く長い日程を終え、心地よい疲労にひたった。

翌五月一日、快晴であれば、もういっちょう妙高山も登りきってと考えていた。しかし、深夜からの風雨で、快適だったテントも濡れそぼつ。濃い霧に高谷池周辺もかすみ、もはや向こう二日間、好天が望めないと判断した我々は、当初より本日帰京予定であった前神・佐藤両名と共に下山を直ちに決めた。

乳白色の霧が這いあがり、小雨を供って視界をさえぎる中、雨をくぐる様にして下山を開始した。途中より、兵藤・佐藤と私は黒沢ルート、金子・前神両名は、尾根ルートに分かれ、一気に下っていった。黒沢の左岸沿いは、途中数カ所亀裂があったものの、容易にかわすことがで

きた。コブシやヤマザクラが点在する灌木帯で、細かいスキー操作を強いられたものの、難なく笹ヶ峰に帰着した。下界は雨もほぼあがって、重い残雪から漸く解放された大地にフキノトウが散見された。帰途妙高温泉でひと風呂浴びて、久し振りの成功登山を、我々は意気軒高に締めくくった。

コース・タイム

四月三〇日、晴れ 七時三〇分笹ヶ峰牧場発
十一時三〇分 高谷池(幕営) 十二時三〇分発
十四時 火打山頂 十五時 帰幕 五月一日雨
七時三〇分 高谷池発 九時三〇分 笹ヶ峰牧場



会務報告

本会報は一月三十一日の新年会の席上、出席者に配布できるよう準備を進めて来ましたが、最終校正の段階で、会報担当幹事の実家が震災に見舞われる等のハプニングがあり、目標をクリアできませんでした。従って、幸か不幸か最新の会の動きも掲載する事が可能となりました。

◇平成六年度 針葉樹会総会

日時：七月二日（土）午前十一時三〇分

場所：如水会館 武蔵野の間

出席者：名和泰三、増山清太郎、佐々木誠、岩崎利一、佐野茂雄、小林茂雄、松下順吉、樋口洪、山崎拡、石井左右平、田中一雄、望月敏治、横山皖一、石原脩、松尾寛二、山本健一郎、中村保、渡辺嘉佑、高橋信成、金子晴彦、西牟田伸一、加藤博行、引地真、米田篤裕、稲毛尚之、石丸義男、河野正、他学生七名

今年の定例総会は、参加者の高齢化、若手の週日夜の多忙を考慮して、土曜日の昼間に開催した。石原会長挨拶、増山さんの乾杯の音頭で開会。定例の決算報告、予算の承認、評議員、幹事の改選の後、現役諸君の活動結果、活動予定の報告があった。

今年、珍しく四人も入部した一年生を抱えて、唯一人の四年生、古瀬リーダーの苦勞が思いやられる。このあと、海外での長い活動から帰国された横山、中村両氏から、スリランカ、ミヤンマーの興味深い話があった。宴もたけなわの頃、昨年飯豊連邦で不慮の事故に会われ、長いリハビリの末、ようやく回復された久保孝一さんが車椅子で来場され、事故の様子を報告された。

◇新年度役員幹事

会長：石原脩 副会長：高崎治郎

評議員：松下順吉、小林茂雄、樋口洪、田中一

雄、笠原広信、山本健一郎、上原利夫、

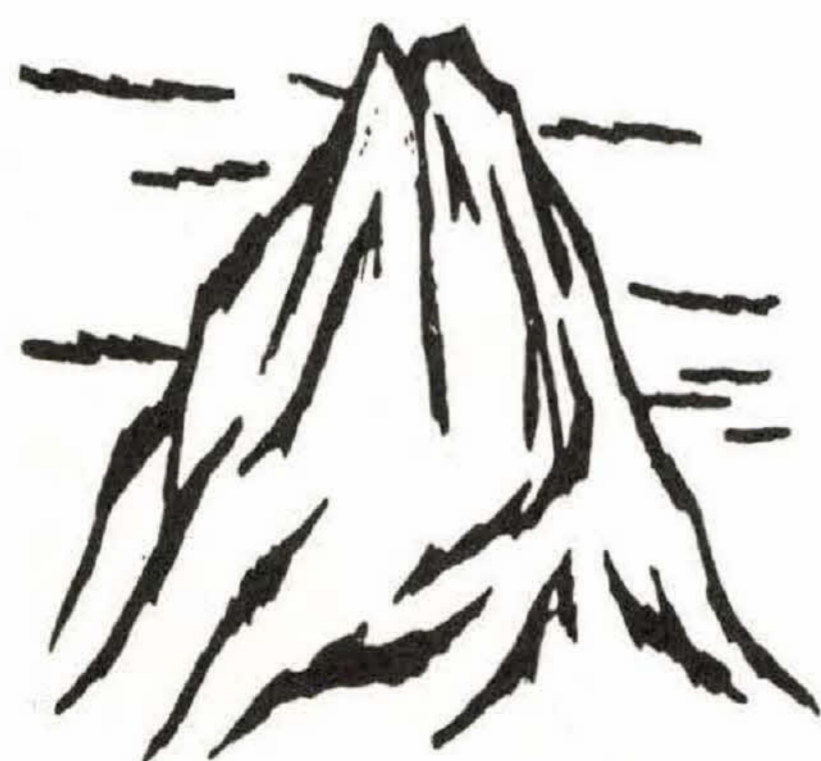
倉知敬、佐藤久尚、中村雅明、松尾信

孝、加藤博行、兵藤元史、松田重明、

引地真（会長、副会長は評議員兼務）
幹事：「代表幹事」西牟田伸一 「総務」石丸

義男 「会計」米田篤裕 「会報」引地
真、稲毛尚之 「山行」加藤博行、兵
藤元史 「学生」西牟田伸一、天羽康
之 「保険」米田篤裕

（尚、加藤博行は香港転勤の為現在欠員）



平成5年度決算及び6年度予算

| 平成5年度 決 算 | | 単位：円 | |
|-----------|------------------------|-------|----------------------|
| 支 出 | 金 額 | 収 入 | 金 額 |
| 会報発行費 | 191,735※a (500,000) | 納入会費 | 513,000 (850,000) |
| 総務／雑費 | 75,456※b (60,000) | 雑収入 | 36,341※c (0) |
| 通信／連絡費 | 64,889 (100,000) | 前年度繰越 | 21,455 (21,455) |
| 学生保険費 | 40,000 (40,000) | | |
| 山岳部補助 | 150,000 (150,000) | | |
| 次年度繰越 | 48,716 (21,455) | | |
| 合 計 | 570,796 | 合 計 | 570,796 |

() 内は、予算の数字

平成5年度 遭難対策基金収支計算書

単位：円

| 支 出 | 金 額 | 収 入 | 金 額 |
|---------|--------------------------|---------|--------------------------|
| 学生保険料 | 40,000 (40,000) | 前年度基金有高 | 4,757,930 (4,757,930) |
| 当年度基金有高 | 4,810,408 (4,897,408) | 利息 | 52,478 (140,000) |
| | | 学生保険料 | 40,000 (40,000) |
| 合 計 | 4,850,408 | 合 計 | 4,850,408 |

() 内は、予算の数字

平成6年度 予 算 案

単位：円

| 支 出 | 金 額 | 収 入 | 金 額 |
|-------|----------|-------|-----------|
| 会報発行費 | 400,000 | 納入会費 | 900,000※a |
| 総務／雑費 | 60,000 | 前年度繰越 | 48,716 |
| 通信費 | 100,000 | | |
| 学生保険費 | 60,000※b | | |
| 山岳部補助 | 150,000 | | |
| 名簿作成費 | 150,000 | | |
| 次年度繰越 | 28,716 | | |
| 合 計 | 948,716 | 合 計 | 948,716 |

平成6年度 遭難対策基金予算案

単位：円

| 支 出 | 金 額 | 収 入 | 金 額 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 学生保険料 | 40,000 | 前年度基金有高 | 4,850,408 |
| 当年度基金有高 | 5,100,408 | 新規基金組入金 | 100,000※ |
| | | 利息 | 150,000 |
| | | 学生保険料 | 40,000 |
| 合 計 | 5,140,408 | 合 計 | 5,140,408 |

※久保孝一郎氏より寄付

◎ カカルポラジ遠征に関する臨時評議員会

日時：一月二五日（水）

場所：如水会館 記念室

出席者：松下順吉、小林茂雄（議長）、田中

一雄、石原脩、山本健一郎、中村保、

中島寛、西牟田伸一、引地真、天羽

康之、（委任状出席五名）

・遠征計画の経緯および偵察隊計画の概要説明

・決議内容については別途会員諸氏に連絡済み

◎ 平成七年新年会

日時：一月三一日（火）場所：如水会館

武蔵野の間

出席者：名和泰三、吉沢一郎、同夫人、増山

清太郎、佐々木誠、岩崎利一、森一

則、小林茂雄、高野秀男、松下順吉、

樋口洪、山崎拓、石井左右平、田中

一雄、上田駿策、横山皖一、石原脩、

高崎治郎、松尾寛二、中村保、上原

利夫、沢木一夫、宇田川徳治、渡辺

嘉佑、中島寛、有賀盈、大建二郎、

遠藤晶土、高橋信成、倉知敬、佐藤

久尚、西牟田伸一、井草長雄、前神

直樹、引地真、石丸義男、田形裕樹、

他学生五名

カカルポラジ遠征に関する評議員会の報告に

続き、新入会員田形祐樹の紹介、尾身幸次氏

（S三二卒）の入会承認、物故者の紹介、故佐

野茂雄氏遺族からのご寄附（十万円）の紹介が

あった。

河野正、天羽康之、坪井充、田

形祐樹、引地景子

新年会に出られなかった若手が多く出席し、

予想外の盛況であった。

残余金は遠征資金口座に寄付。

物故者名簿 心よりお悔やみ申し上げます。

黒田正治（S十一卒）H六・十・三

心不全のため享年八二才

佐野茂雄（S十六卒）H六・九・五

鈴木 肇（S十九卒）H六・六・十

石田信隆（S四一年）H六・六・一

◎ カカルポラジ偵察隊壮行会

日時：二月二日（木）

場所：如水会館 記念室

出席者：（隊員）引地真、古田茂、古瀬泰介、

（同行記者）上堀慶、川口敏彦

（読売新聞）島田運動部長、清本外

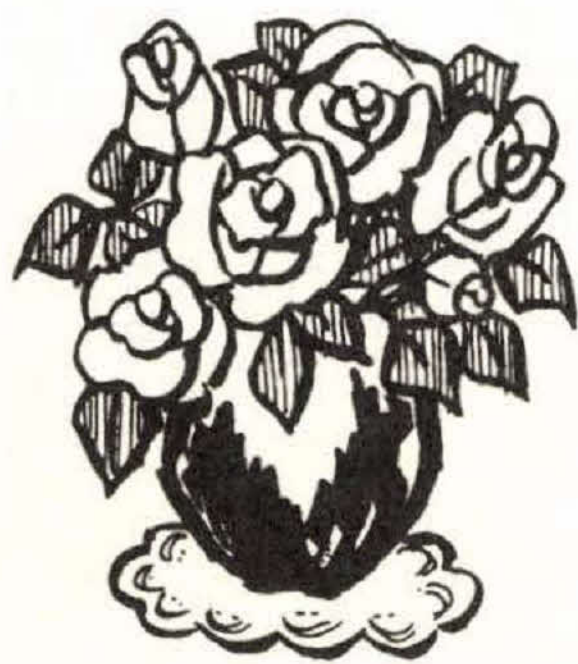
報部次長、山本健一郎、中村保、

中島寛、竹中彰、長沢道彦、中

村雅明、金子晴彦、西牟田伸一、

松尾信孝、井草長雄、兵藤元史、

佐藤活朗、白石章治、川名真理、





☆編集後記☆

予定を超えてしまいましたでしたが何とか発行にこぎ着けることができました。

本号は、昨秋の懇親山行の記録を中心に考えておりましたが、予想外に原稿が多く集まり、嬉しい悲鳴を上げてしまいました。また、刊行直前にミュンマーのカカルポラジ遠征のニュースも飛び込み、壮行会の様子等も代表幹事に記して頂くことができました。

次号は是非共カカルポラジ偵察の様子を載せたいと考えております。

追伸：阪神大震災に関しまして、お見舞いのお電話を頂戴しましたこと誌面を借りてお礼申し上げます。お蔭様で家族並びに家屋とも無事ですのでここにご連絡いたします。

稲毛尚之

